

平成12年度

市原市内遺跡発掘調査報告

しい づ しょう ぼう やま しろ あと
椎 津 正 坊 山 城 跡

のう まん い せき ぐん
能 満 遺 跡 群

いま とみ い せき ぐん
今 富 遺 跡 群

2001

市原市教育委員会

序 文

市原市は、温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、有史以来、たくさんの人々が住み、郷土の歴史を育んできました。国指定史跡上総国分寺跡や国分尼寺跡、「王賜」銘鉄剣の発見された稲荷台古墳は、これら先人の足跡の一端を、今に伝えるものです。

バブル経済崩壊後の日本の経済は、いまだに深刻な状況から脱してはいませんが、地域での発展には明るい兆しも見え始めているようで、市域内での開発行為はここ数年緩やかながらも、増加の傾向にあります。そのような中で、いかに開発と文化財の保護とを協調させていくかは、今日の私たちに課せられた大きな課題と云えましょう。

本報告書は、開発によって失われていく市内遺跡について、国庫および県費の補助を受けて行った発掘調査の成果をまとめたものです。

本書が学術資料としてはもとより、より多くの方々の郷土史への窓となって、広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまでご指導いただきました関係諸機関各位に、心より御礼申し上げます。

平成13年 3月

市原市教育委員会

教育長 大 野 皎

例 言

- 1 本書は、国庫および県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は、市原市教育委員会の依頼により財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行は市原市教育委員会で行った。
- 3 今年度実施した発掘調査は下記の通りである。
 - (1) 椎津正坊山城跡（調査コード セ320） 椎津字北辺田537-1の一部
集合住宅建設に伴う調査。対象面積1751.37㎡について190㎡の確認調査を実施した。
 - (2) 能満遺跡群（セ323） 能満字二階台531
個人住宅造成に伴う調査。対象面積499.56㎡の内190㎡の確認調査を実施した後、工事影響範囲の163㎡について本調査を実施した。なお、「能満遺跡群」は広大なため、本報告では所在地字名より「二階台地点」を付加し、呼称する。
 - (3) 今富遺跡群（セ324） 今富字立野前925-1,925-2(一部)
墓地造成に伴う調査。対象面積1788.53㎡について179㎡の確認調査を実施した。なお、(2)同様、本報告では、所在地字名より「立野前地点」と付加し、呼称する。
- 4 上記の発掘調査および本書の執筆・編集は、牧野光隆が担当した。
- 5 本書に使用した地形図は、市原市発行の1/2,500地形図および国土地理院発行の1/25,000「姉崎」・「蘇我」・「五井」である。
- 6 椎津正坊山城跡および今富遺跡群立野前地点における測量は、任意の座標を設定し、水準は1/2,500地形図中の数値を基準とした。北方位は、ともに工事設計図面より引用した。

本文目次

序文

例言 目次

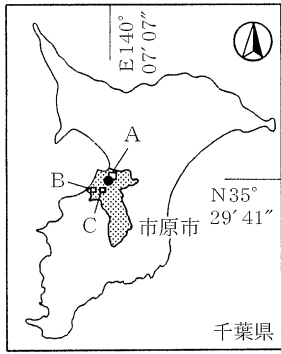
第1図 調査区の位置と周辺の遺跡	1
1 椎津正坊山城跡	2
2 能満遺跡群 二階台地点	5
3 今富遺跡群 立野前地点	15

図版目次

図版1	椎津正坊山城跡
図版2～5	能満遺跡群 二階台地点
図版6・7	今富遺跡群 立野前地点

挿図目次

第1図 調査区の位置と周辺の遺跡	1	第10図 001 竪穴住居跡 掘り形実測図	10
第2図 椎津正坊山城跡周辺地形図	2	第11図 002 A・B 竪穴住居跡実測図・出土遺物	11
第3図 椎津正坊山城跡全体図、 Kトレンチ実測図・出土遺物	3	第12図 003 竪穴住居跡実測図・出土遺物	12
第4図 正坊山城跡・椎津城跡(部分)概念図	4	第13図 004 竪穴住居跡・005 溝跡実測図・ 出土遺物、遺構外一括遺物	13
第5図 能満遺跡群二階台地点周辺地形図	5	第14図 今富遺跡群立野前地点周辺地形図	15
第6図 能満遺跡群二階台地点調査区全体図	6	第15図 今富遺跡群立野前地点調査区全体図、 A・Pトレンチ実測図・出土遺物	16
第7図 001 竪穴住居跡実測図	7	第16図 今富遺跡群立野前地点表採石塔類実測図(附表)	17
第8図 001 竪穴住居跡遺物分布図・出土遺物	8		
第9図 001 竪穴住居跡出土遺物	9		



- ★ 調査区
1. 能満城主郭跡
 2. 府中日吉神社
 3. 白船城跡
 4. 五所四反田遺跡
 5. 市原城跡
 6. 光善寺廃寺跡
 7. 古甲遺跡
 8. 三嶋台遺跡

9. 郡本遺跡
10. 唐崎台遺跡
11. 郡本大宮遺跡
12. 千草山遺跡
13. 稲荷台遺跡
14. 向原台遺跡
15. 加茂遺跡

市原市地方史研究連絡協議会 1999

「市原市郡本周辺の遺跡と文化財」

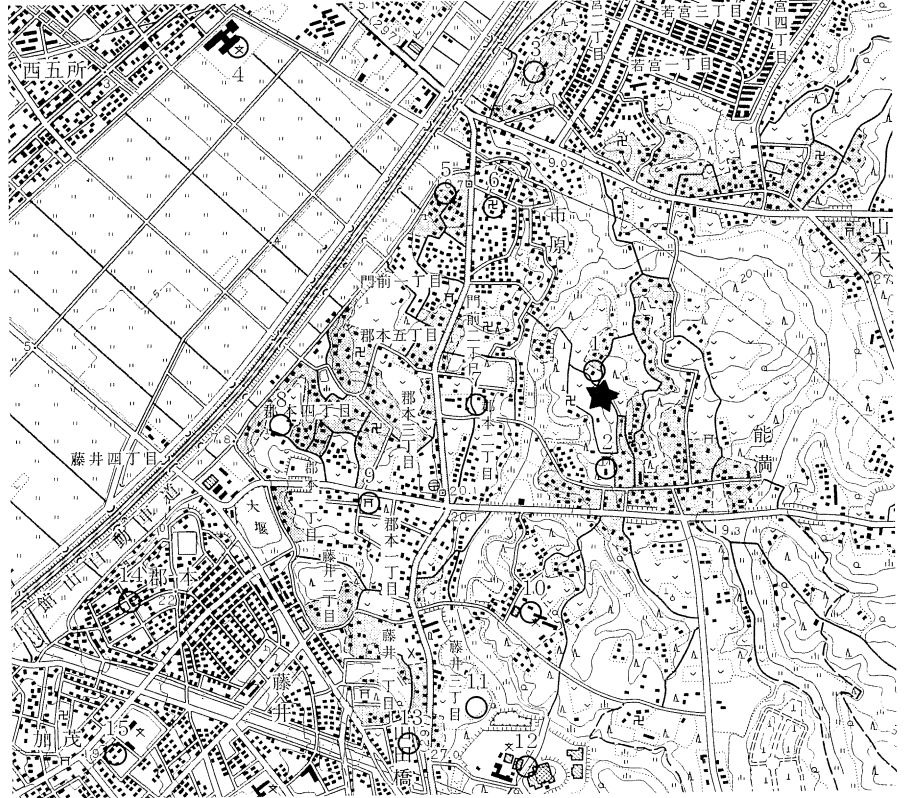
唐崎台遺跡発掘調査団・市原市教育委員会 1979
「唐崎台」

勸市原市文化財センター 1989

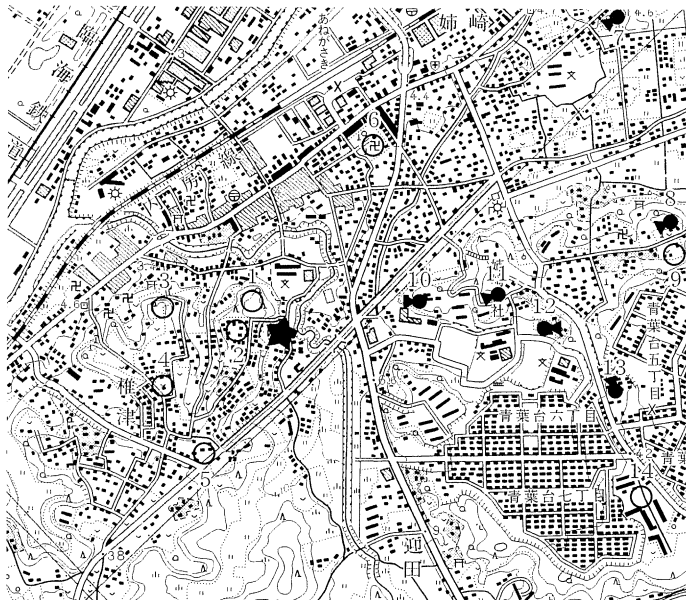
「千草山遺跡・東千草山遺跡」

1991「郡本大宮遺跡」

1998「市原城郭跡」



A. 能満遺跡群二階台地点周辺遺跡



B. 椎津正坊山城跡周辺遺跡

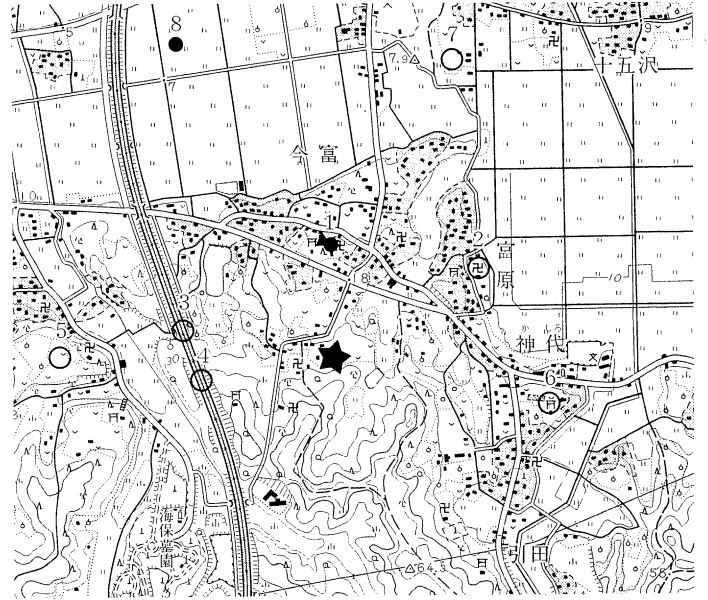
- ★ 調査区
- | | | |
|-----------|----------|------------|
| 1. 正坊山城跡 | 5. 尾崎遺跡 | 10. 山王山古墳 |
| 2. 茶ノ木遺跡 | 6. 妙経寺遺跡 | 11. 釈迦山古墳 |
| 3. 椎津城主郭跡 | 7. 二子塚古墳 | 12. 鶴窪古墳 |
| 4. 五霊台遺跡 | 8. 天神山古墳 | 13. 原1号墳 |
| | 9. 東原遺跡 | 14. 六孫王原遺跡 |

千葉県教育委員会 1990

「千葉県中近世城跡研究調査報告書第10集 椎津城跡」

勸市原市文化財センター 1992「椎津茶ノ木遺跡」

1998「五霊台遺跡」



C. 今富遺跡群立野前地点周辺遺跡

- ★ 調査区
- | | |
|-----------|----------|
| 1. 今富塚山古墳 | 5. 海保城跡 |
| 2. 宮原御所跡 | 6. 神代城跡 |
| 3. 今富遺跡 | 7. 今富廃寺跡 |
| 4. 新山遺跡 | 8. 佐敷戸古墳 |

勸千葉県文化財センター

1992「市原市今富塚山古墳確認調査報告書」

1998「市原市今富遺跡」

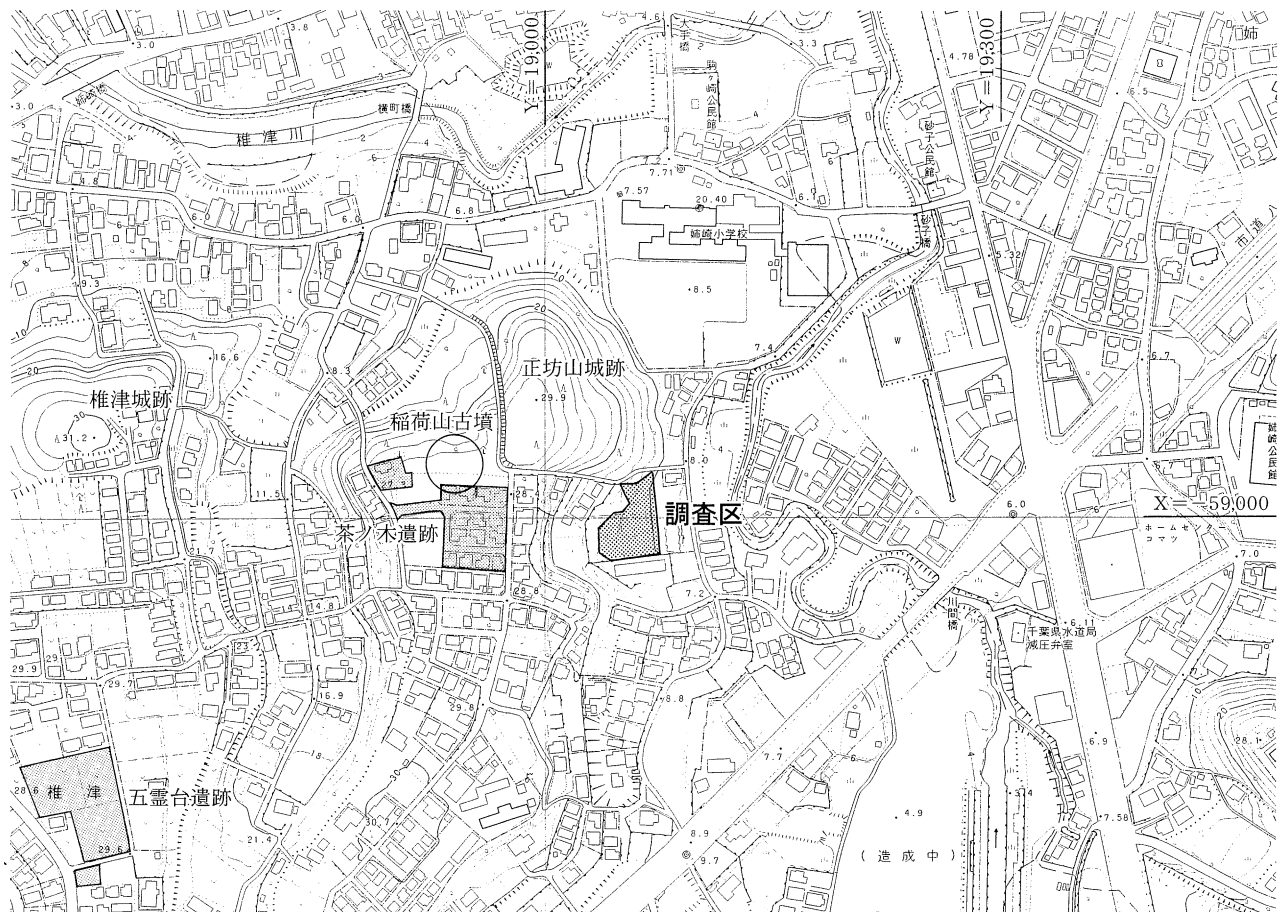
第1図 調査区の位置と周辺の遺跡

1. 椎津正坊山城跡 (第2～4図、図版1)

調査概要 今回の調査区は、正坊山城跡とは切り通し状の道をはさんでその南側に隣接した斜面地である。椎津川(境川)の河岸段丘上にあり、標高は9～14mほどである。現況は畑地であり、表面には土師器片がまばらにみられた。西側斜面上方の台地上には、遺構密度の高い古墳時代後期の集落を中心とした茶ノ木遺跡が展開している。その集落範囲が、斜面地ではあるが東側の今回の調査区内にも及んでいる可能性が考えられた。季節は初夏であり、収穫間近のジャガイモや豆類あるいはネギなどを避けながら、AからNまで14ヶ所のトレンチを設定して調査を行った。そのため、トレンチの規模および間隔などは一定ではない。

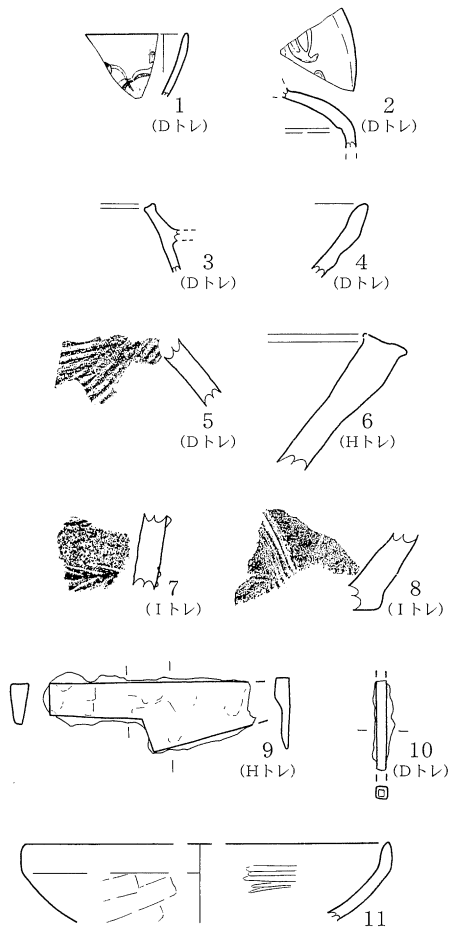
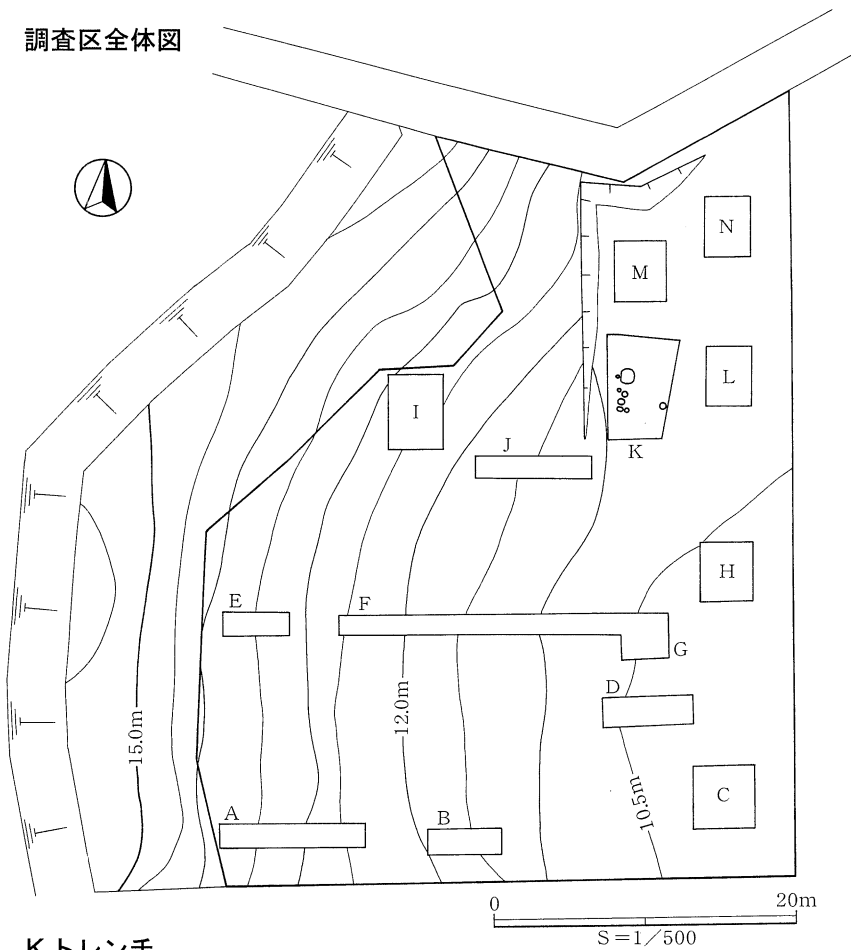
重機によって表土あるいは堆積土を慎重に除去した結果、この斜面地一帯が谷の中であることが判明した。調査区中央付近では、現表土から3mほど掘り下げても、暗褐色の堆積土は変わらなかった。Aトレンチ西端では地山と思われる白色粘土層がほんの一部で検出されたものの、すぐに北東方向に落ち込んでいた。調査区北東部付近は近年になって削平されており、「下総層群姉崎層」と呼ばれる古東京湾の海底に堆積した砂層の露頭が、K・Mトレンチの西側に観察できる状況である(図版1)。なお、その露頭の西側は正坊山に一番近接した部分であるため、遺構の存在が考えられる有望な地点であったが、耕作物の関係で調査できなかった。宝永の火山灰(1707年降下)が、B・C・D・Fトレンチにおいて検出された。いずれも現表土より60～90cmほど下位の層で水平堆積をなしていた。

調査区全体から土師器や中・近世陶磁器が出土したが、どれも小破片である上に摩滅しているものが多くあり、台地上部からの流れ込みである可能性が高い。特に土師器は摩滅が顕著であった。

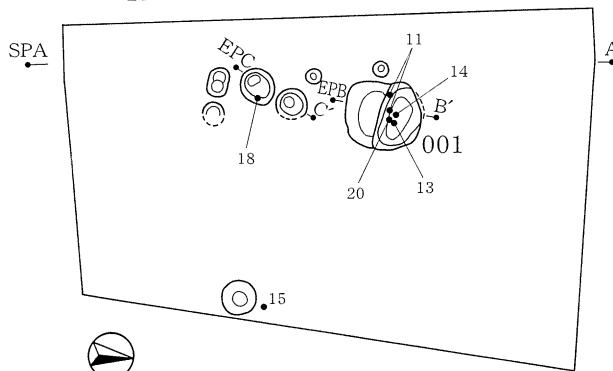
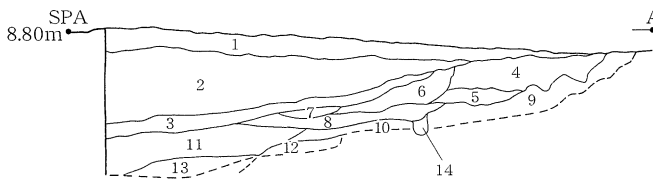


第2図 椎津正坊山城跡周辺地形図 (S=1/5,000)

調査区全体図

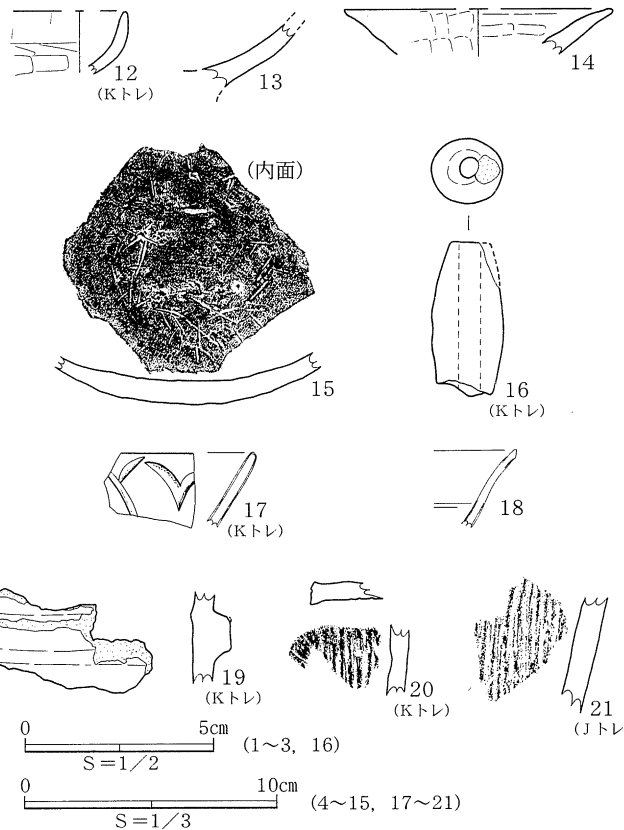


Kトレンチ



Kトレンチ土層説明

- | | |
|----------------|-------------------------|
| 1 表土 | 8 黒褐色 炭化物多量 |
| 2 褐色土 | 9 赤褐色 砂層 (下総層群姉崎層) しまり強 |
| 3 暗褐色 焼土粒・炭化物多 | 10 灰褐色粘土層 白色粒多 |
| 4 暗褐色 白色粒多・炭化物 | 11 暗褐色 粘性強 |
| 5 4+黄色粘土ブロック | 12 明褐色粘土層 |
| 6 暗灰褐色 灰白色粘土 | 13 黒褐色粘土層 |
| 7 灰褐色 白色粘土・炭化物 | 14 灰褐色粘土層 砂 ビット覆土 |



第3図 椎津正坊山城跡全体図、Kトレンチ実測図・出土遺物

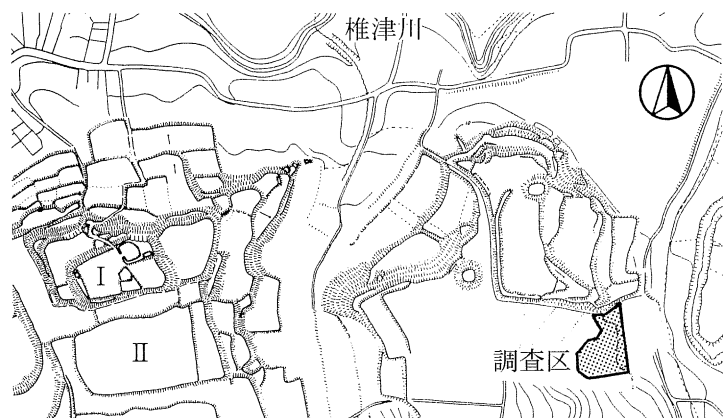
遺構と遺物 Kトレンチにおいてのみ遺構が検出された。Kトレンチ付近は、地盤が南に向かって急激に落ち込む場所にあたり、谷底へ向かう傾斜地である。

土坑1基とピット7基を調査した。001土坑は長径98cmの隅丸方形を呈し、北側半分が一段深い。覆土からは鬼高期の赤彩された坏(第3図11)が出土した。しかし、この土坑と覆土が酷似している隣接ピット群の覆土上層から、口唇部口禿の白磁碗(18)や渥美の甕片が見つかった。遺構の掘り込まれた層(10層)も同一であったため、ともに中世14世紀代の所産であると考えられる。付近より青磁の劃花蓮弁文碗(17)や常滑の山茶碗系こね鉢も出土している。その後トレンチ周辺を拡張したが、若干の炭化物と性格不明のピットを1基検出したのみであった。他に、Kトレンチ内からは古墳時代後期の土師器(12・15)や、時期不明の土錘(16:12.3g)、埴輪片(19~20)が出土している。15は甕の丸底部分である。内面には、ヘラ磨きの後にさらに線状の傷を多数つけた跡がみられた。19は円筒埴輪の突帯部分である。20は透かしと考えられる部分がみられる。21とは同一個体の可能性がある。

各トレンチ出土遺物 第3図1は染付の口縁部である。小片のため器種は特定できないが、小型の製品であろう。2は青白磁の合子の蓋であり、陽刻がみられる。ともに中国産である。染付は、椎津城跡の調査(千葉県教育委員会 1990)で碗が出土している。3は東海系羽釜、4は古瀬戸後期様式の皿である。5は渥美産の甕。6は常滑産のこね鉢。7は刻みを伴う隆帯から、縄文時代前期諸磯b式と比定できる。近隣では、茶ノ木遺跡の調査で縄文早期の破片が確認されている程度であり、前期の遺跡は確認されていない。8は瀬戸の播り鉢の底部付近破片である。9と10は不明鉄製品であり、9は包丁状の製品である。鉄滓が各トレンチから出土しており、数量は以下の通り。Aトレ1点(43.1g)・Bトレ10点(178.7g)・Cトレ2点(16.4g)・Dトレ11点(235.9g)・Jトレ3点(73.4g)

まとめ 椎津正坊山城は、その構造から、椎津城の出城である、もしくは椎津城の敵対勢力の築いた城であるという相反する考え方がある。名称の「正坊山」は「小防山」の音が変化したものとも推測できる。とすると、「小さく防ぐ」の意から、椎津城勢力側による外郭としての構築ということになるであろうか(註1)。しかし、具体的調査事例もないため築造時期もいまだ不明であり、椎津城とは使用時期に差がある可能性も否定できない。

今回の調査区は谷地形の中に入るかたちとなっており、斜面の堆積土中に遺物が流れ込んだ状態であった。遺構は地形上の制約があり、正坊山に隣接した北側地点のみで検出された。出土した白磁や青磁、染付などの陶磁器類は時期差を含むものの、正坊山城跡がこの時期の遺構であると考えてよいであろう。ただ、茶ノ木遺跡の調査でも、正坊山城跡に関連する堀などの遺構は確認されていない。今回の調査はトレンチによる確認調査であったが、そのような遺構は見あたらなかった。南側斜面のこのあたりにも関連する遺構がみられないとすると、正坊山城跡の範囲は限られるであろう。



第4図 椎津正坊山城跡・椎津城跡(部分)概念図

櫻井敦史「椎津尾崎遺跡」市原市文化財センター年報
平成6年度より改変・転載 S=1/6,000

註1 田中清美氏ご教示による。

2. 能満遺跡群 二階台地点 (第5図～第13図・図版2～5)

調査概要

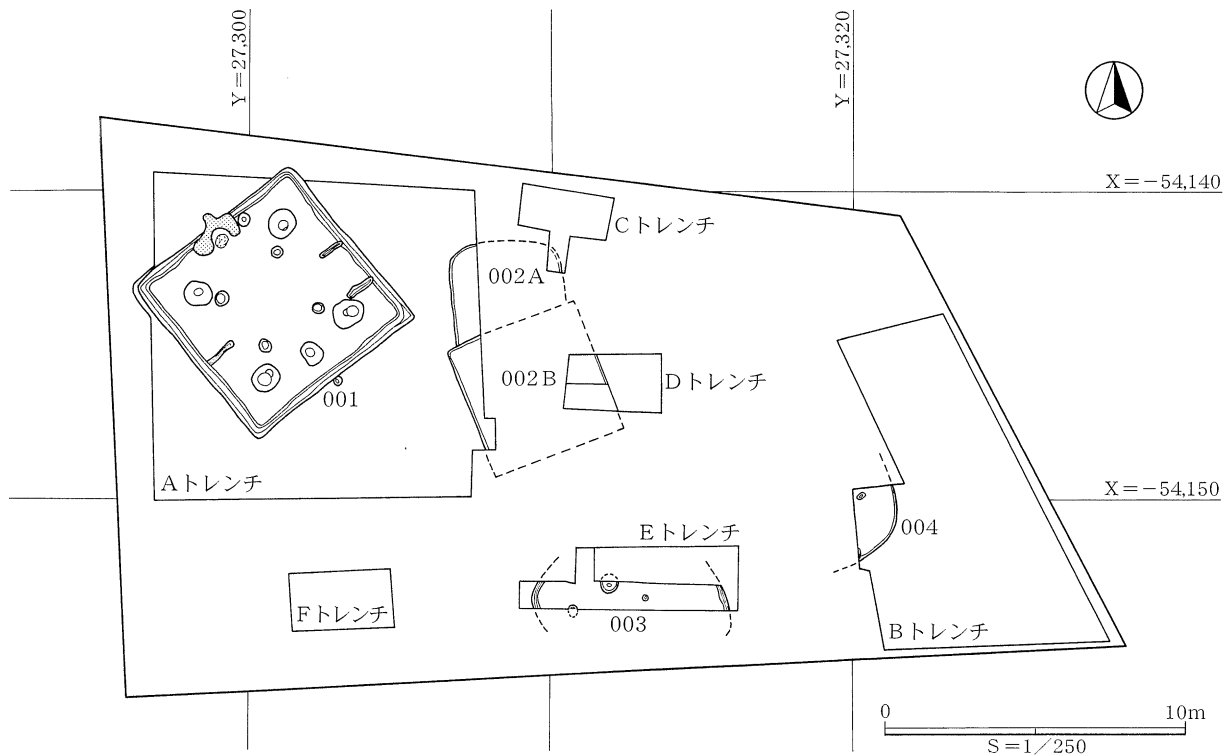
調査区は、能満城の主郭跡部分(字城山)より南南西に40mの場所に位置する(下図参照)。現標高は26～27mである。個人住宅造成により、調査区内の母屋・駐車場および階段・浄化槽の3カ所は、基礎工事などで深く掘削されるため、本調査範囲とした。それ以外の部分は庭となるため、確認調査にとどめた。現況は畑地であり、調査区の全域が、ゴボウ耕作時に使用する「トレンチャー」によって格子状に深く攪乱されている状態であった。そのためか、接合復元できる遺物はほとんどなかった。遺構の実測にあたって、平面直角座標(第IX系)と水準は、約300m南東にある能満城(セ314:市道241号線改良工事埋蔵文化財調査)の調査用基準杭より移設した。

遺構と遺物

確認調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居跡3軒、古墳時代後期の竪穴住居跡2軒を検出した。そのうち建築計画範囲に入る4軒(3軒は部分的範囲)について、本調査を行った。



第5図 能満遺跡群二階台地点周辺地形図 (S=1/5,000) ※能満城主郭跡部分は小高春雄1999「市原の城」より転載



第6図 能満遺跡群二階台地点調査区全体図

001 竪穴住居跡(第7～10図・図版2～4)

遺存状況 北西壁付近の覆土上層を005溝跡によって削平 トレンチャー2方向以上床面まで影響
規模 6.50m×6.55m ほぼ正方形

壁高 カマド付近005溝跡による削平部15.1cm ～ 出入り口側の壁48.4～61.9cm

主軸方向 N-40°-W **周溝** 幅15.0～28.0cm・深さ3.1cm～12.1cm

柱穴・ピット 主柱穴4本 深さP1:87.3cm、P2:80.0cm(柱あたり73.2cm)、P3:60.9cm、P4:83.2cm 出入り口ピットP5:51.3cm カマド付近ピットP6:71.1cm

建て替え前柱穴4本 P7:51.8cm(柱あたり45.0cm)、P8:34.8cm(柱あたり32.3cm)、P9:57.0cm(柱あたり54.7cm)、P10:41.0cm 竪穴外ピットP11:45.9cm

間仕切り溝 M1:長さ105.0cm・深さ11.8cm、M2:90.0cm・12.4cm、M3:110.0cm・12.0cm

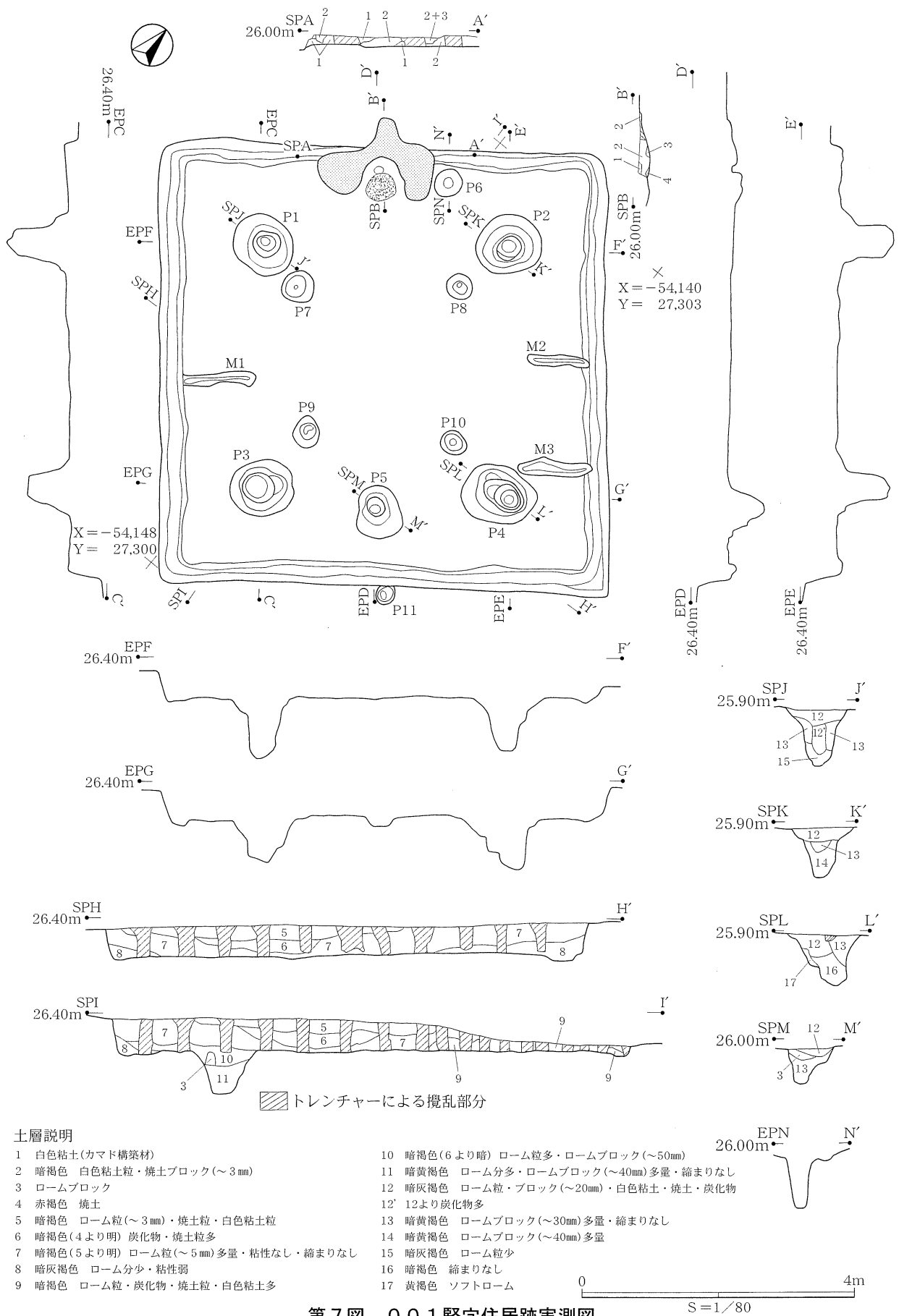
床面 ロームブロックで貼り床を構築する。四隅を除いてほぼ全面的にかなり硬化しており、四隅はロームブロックと暗褐色土との混合土を充填する。これは、掘り形の深さと関連している。

掘り形 四隅を深く掘り下げるタイプ(第10図)(文献1)

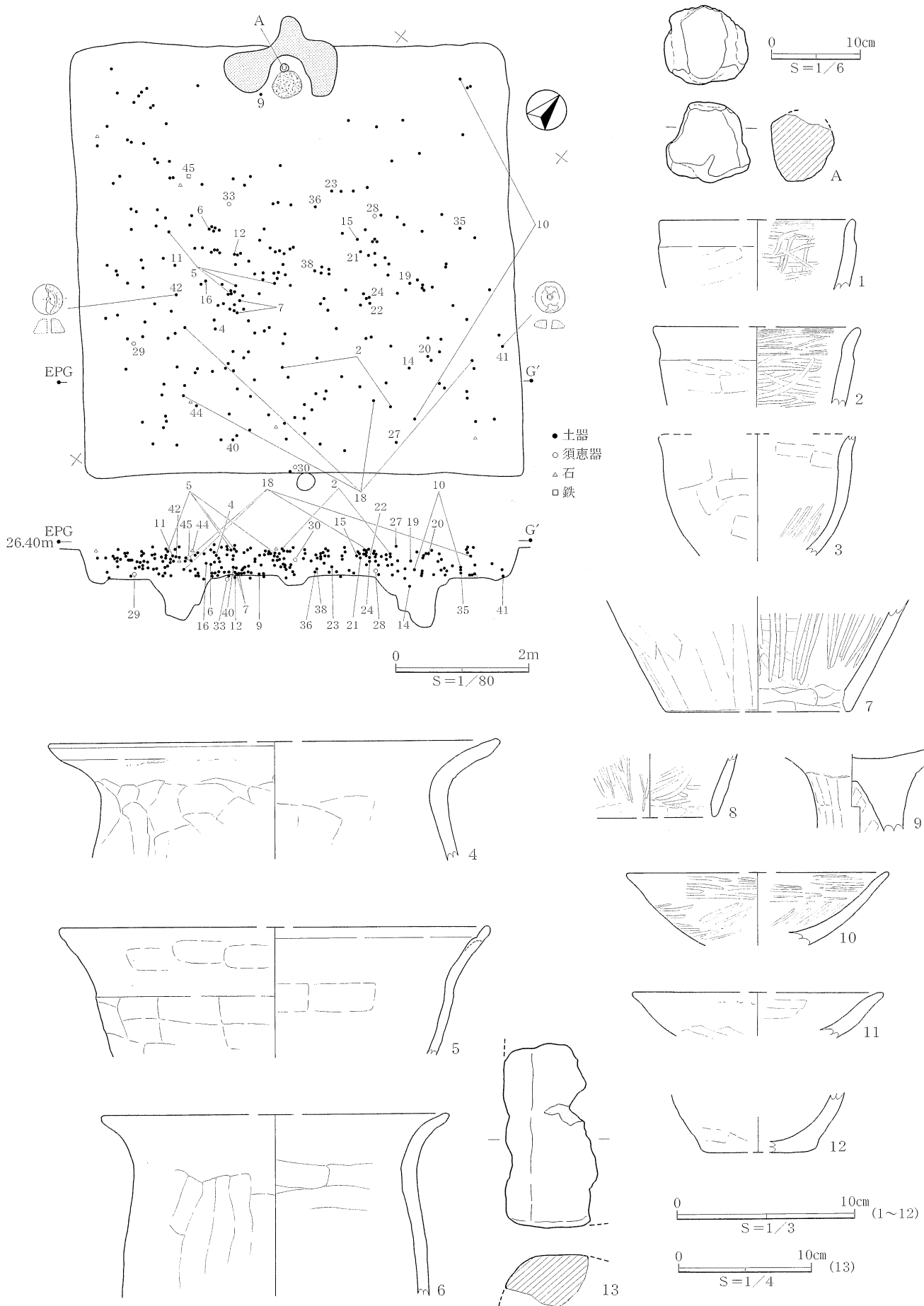
カマド 北西壁中央に位置する。廃絶時に壊されていた様子。床面の広範囲に白色粘土と山砂が散っていた。上層は005溝跡に削られ、更にトレンチャーによる攪乱が激しい。燃焼面の奥側に白色粘土製の柱状物(第8図A)があった。つくりつけであり、あるいはカマドの構造の一部分であろうか。燃焼面より奥にあるという点からもそのように考えられる。

備考 トレンチャーによる攪乱の影響をなるべく避けるために、土層断面を攪乱方向と直交するように設定した。攪乱中の遺物はすべて001一括遺物として取り上げた。

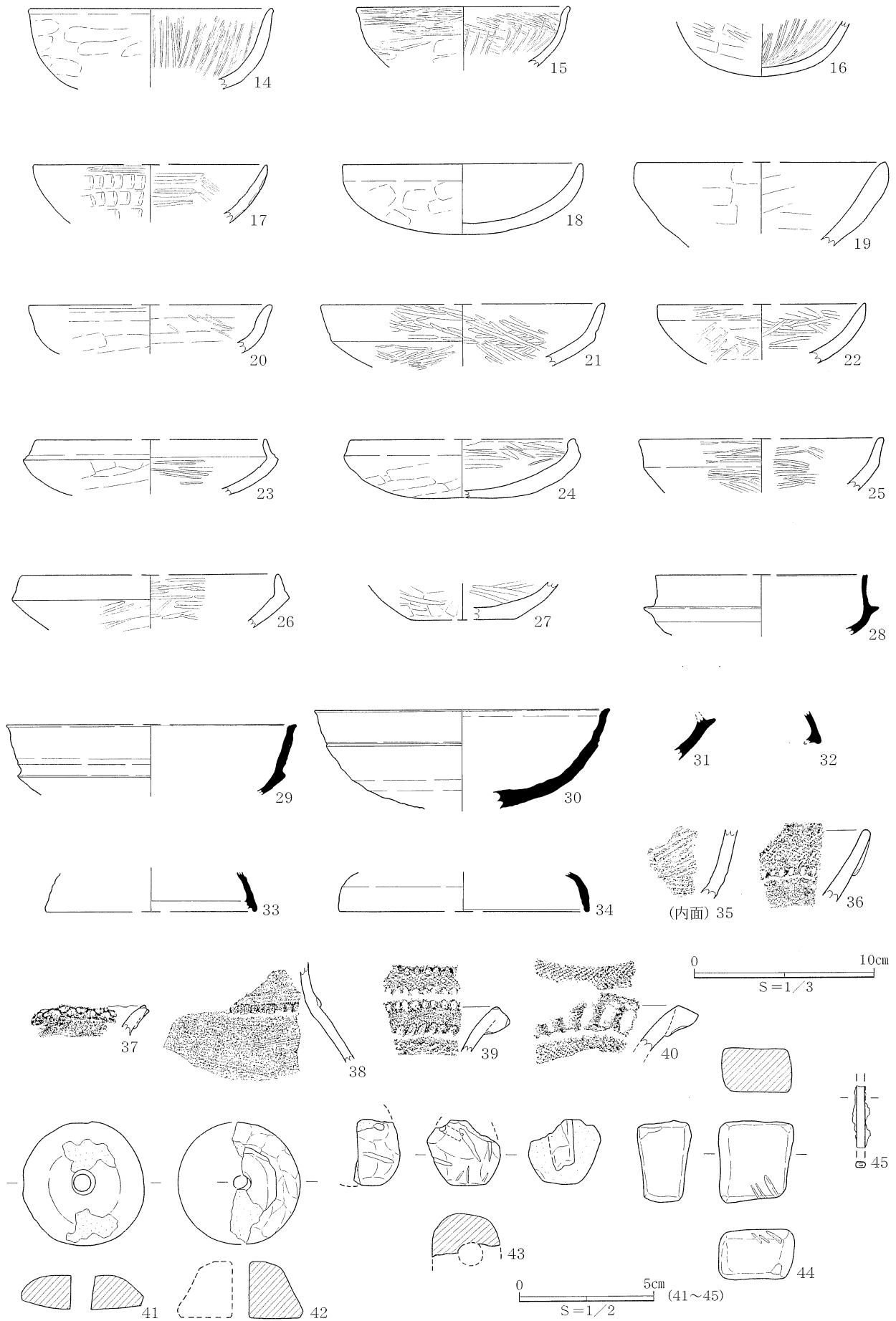
遺物 1～3は小型の鉢である。1・2の内面はよく磨かれており、内面は黒色を呈する。4・6・12は甕である。5は甑であり、胴部外面の調整は横方向のヘラ削りである。7と8も甑である。ともに



第7図 001 竪穴住居跡実測図



第8図 O01 竖穴住居跡遺物分布図・出土遺物



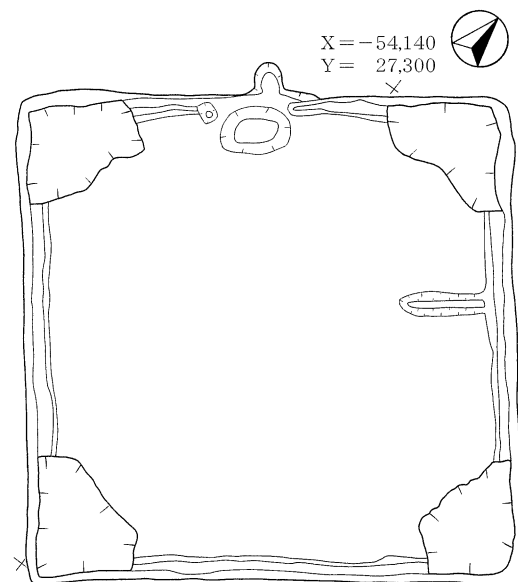
第9图 001竖穴住居跡出土遺物

意外なほど内面がよく磨かれている。9～11は高坏である。9は脚部の径が5cmと太くしっかりしている。カマドの左袖付近より出土した。この形の脚部は、類似したものが他に2点出土している。付近では千草山遺跡の第102号住居跡出土高坏に類例がある(文献2)。13は支脚である。ピット6の覆土内から出土した。14～16は暗文をもつ半球型の坏である。14は焼成が甘く、溶けかかった状態である。14と16は放射状の暗文が黒色を呈している。15は内外面ともに丁寧に磨かれており、内面調整の最後に暗文調に放射状に磨いている。漆仕上げである。17の外面はヘラで押し引き状に削ってある。意図的な意匠であろうか。18は復元できた唯一の坏である。しかし表面はほとんど溶けた状態である。19と24は器壁が非常に厚い。在地独自の形とみられる。22と23は内面漆仕上げである。25は両面赤彩。27の平底の底は、ヘラ削りである。

28～34は須恵器である。28の坏は深く、削りの位置も高い。TK208前後であろう。29と30は無蓋高坏である。29は坏蓋の可能性もある。28と同様に5世紀中頃であろう。口唇が面取りされている。30はTK43～TK209とみられ、28・29とは時期差がある。32～34は坏蓋である。

35は土師器の甕破片であるが、内面の調整が条痕のようで特徴的である。外面はヘラ削りである。36～40は弥生時代後期の土器である。36は鉢で内面赤彩。38は内外面ともに横方向のハケ目状の調整がみられる。39は内面赤彩。口唇上面にRL縄文を施文し、その口唇内側と外側に刻みがはいる。

41と42は土製の紡錘車である。41(34.5g)は床面直上の出土である。表面に艶がなく、よく磨かれた42(半欠19.4g)とは対照的である。43は欠損した不明土製品(7.7g)。盲孔が大小2つ開けられるが、用途はわからない。表面には焼成前の引っ掻き傷が多くつけられる。44は砥石(81.6g)であり、全面に使われた痕跡がみられる。45は不明鉄製品。断面は長方形である。須恵器および弥生土器は混入品であろう。本遺構は7世紀後半の所産と考えられる。



第10図 001 竪穴住居跡掘り形実測図(S=1/100)

参考文献

- (1) 柳戸信吾 2000 「Ⅲ. 住居跡床面観察について」『飯能の遺跡(28) 甲新田遺跡第2次調査・張摩久保遺跡第28次調査』埼玉県飯能市教育委員会
- (2) 田中清美 1989 『千草山遺跡・東千草山遺跡』(財)市原市文化財センター

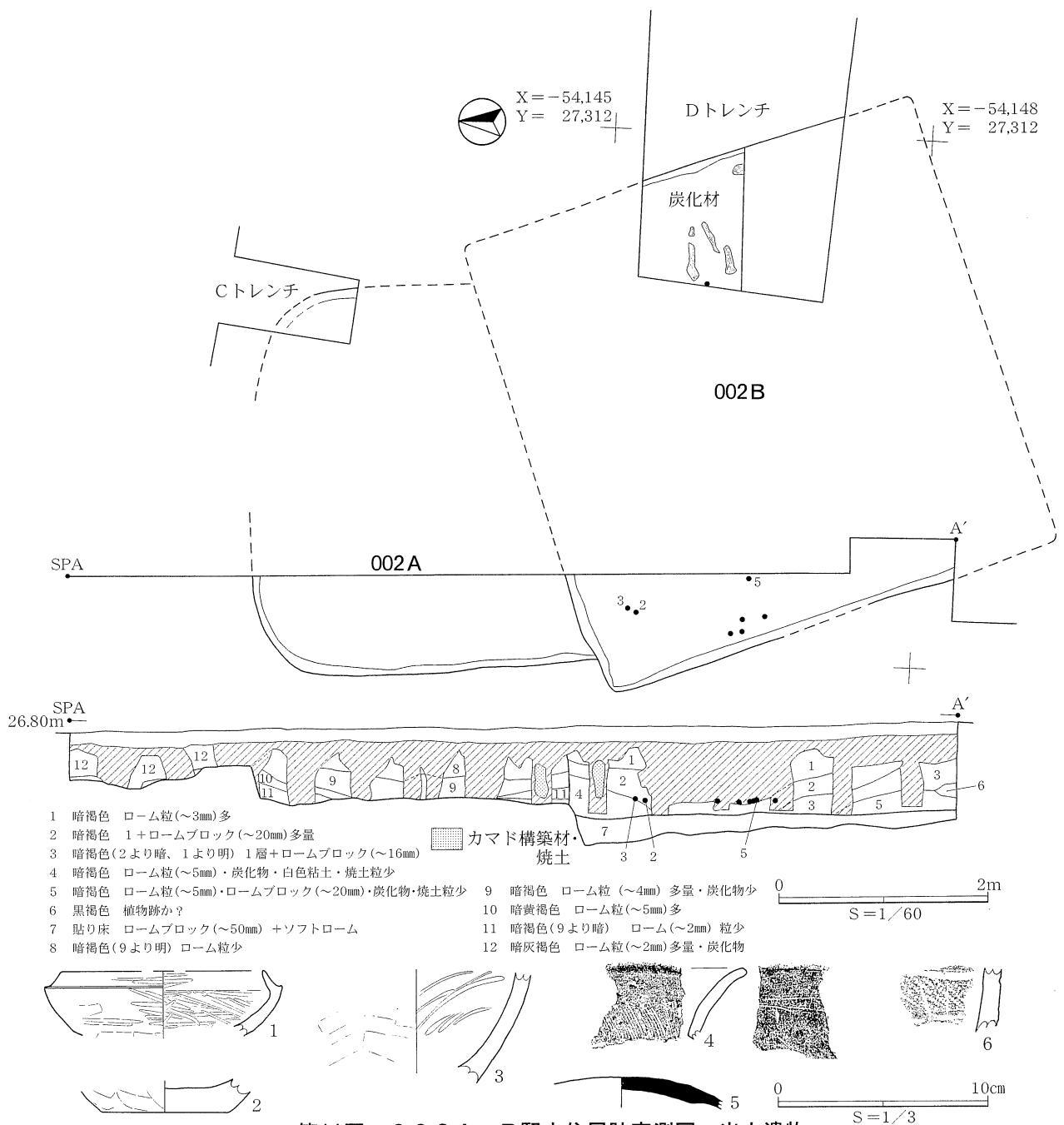
002A 竪穴住居跡(第11図、図版3・5)

遺存状況 トレンチャー2方向床面影響 002B 竪穴住居跡に南側を切られる

規模 4.2m(推定)×3.7m 隅円方形 **壁高** 24.1cm～34.6cm **主軸方向** N-4°-W

周溝・柱穴・ピット・炉 検出されず **床面** ほぼ全面的に硬化

遺物 遺構に伴う時期の遺物で図示できるものはない。第11図6は縄文中期。縄文時代の遺物は、調査区全体で2点のみしか確認されていない。 **所見** Cトレンチを一部拡張して範囲を確認したところ、その形状や一括遺物から、弥生時代後期の住居跡と想定される。



002B 縦穴住居跡 (第11図、図版3・5)

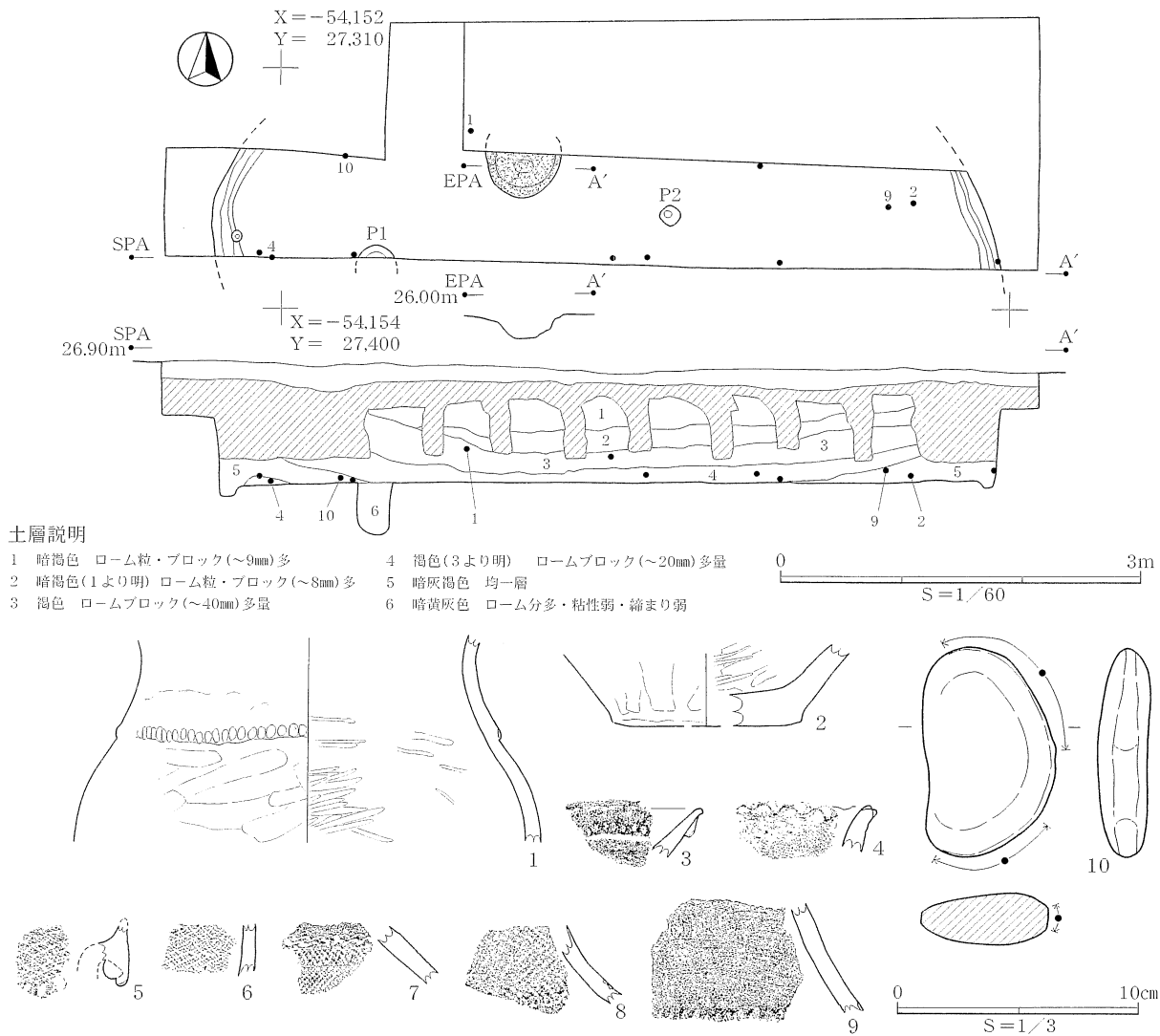
遺存状況 トレンチャー2方向以上床面影響 規模 4.5m(推定)×4.5m 正方形(推定)

壁高 41.0cm～51.3cm 主軸方向 N-20°-W 周溝・柱穴・ピット 検出されず

床面 ほぼ全面的にかなり硬化 ロームブロックで貼り床を構築 貼り床厚さ10cm(西壁中央付近)～26cm(北西隅) 掘り形 001と同タイプか。北西隅が深く掘り込まれている。そこは明らかに暗褐色土の比率が高い土が充填されている。カマド 本体は検出していないが、トレンチャーに壊されて引きずられ、土層断面に焼土粒と白色粘土および山砂が集中している場所がある。そのことより、縦穴の北西壁にカマドがあることが推測できる。

遺物 第11図1は模倣坏である。内外面ともにヘラミガキがなされている。内面黒色仕上げである。4は頸部がくの字状に屈折する甕である。外面はハケ目状の調整がみられる。5は須恵器の坏蓋である。割れた断面が赤褐色を呈し、外面はヘラ削り。001 縦穴の覆土出土の小破片と接合している。

備考 縦穴はA・D両トレンチで検出したが、Dトレンチは確認調査のみで終了した。



第12図 003 竪穴住居跡実測図・出土遺物

003 竪穴住居跡(第12図、図版3・5)

遺存状況 トレンチャー2方向以上覆土攪乱 床面までは届かず

規模 6.0m×5.6m(推定) 隅丸方形 壁高 54.5cm～61.3cm

主軸方向 N-46°-W(推定)

周溝 幅8.0cm～14.0cm・深さ3.0～5.1cm

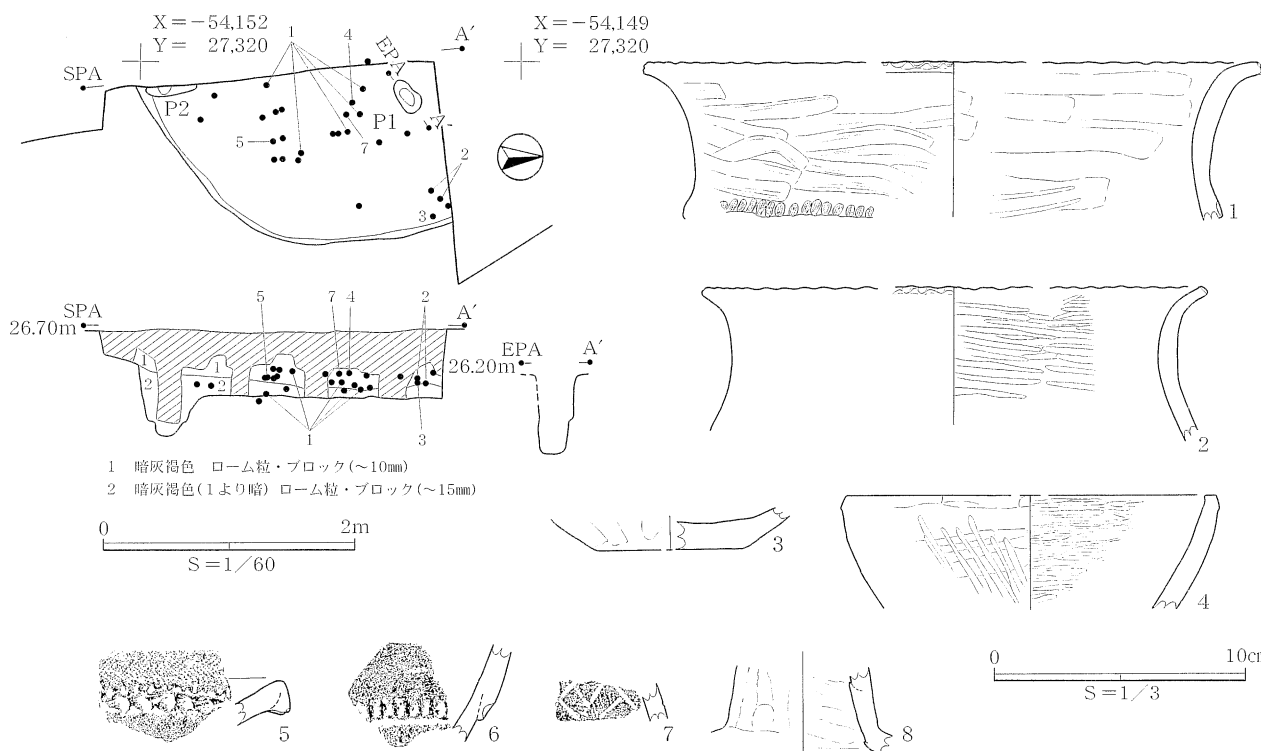
柱穴・ピット 柱穴P1:深さ44.1cm・不明ピットP2:5.6cm

床面 周溝の際まで全面的にかなり硬化して、しっかりしている。貼り床構造ではない。

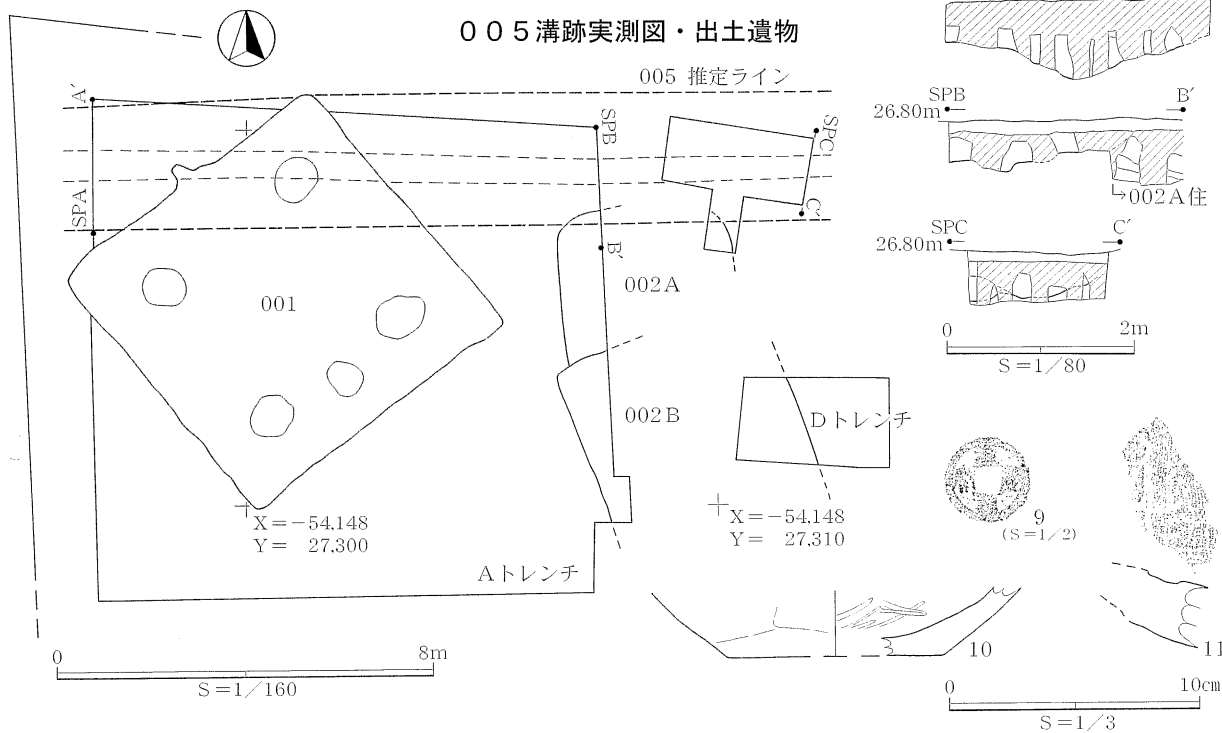
炉 円形、1/2のみ検出。北西中央に位置(推定)。炉床は強く被熱。

所見 竪穴の掘り込みが深く、覆土も典型的なレンズ状堆積となる。5・6層に2cm～5cm大のロームブロックが多く含まれており、廃絶後しばらくしてから、人為的に埋め戻された可能性が高い。この場所が宅地内庭部分にあたるため、確認調査のみで終了した。

遺物 第12図1は甕の頸部から胴部にかかる部分である。細かい目の縄で押圧した刺突が巡る。内面は部分的に磨かれている。2は底部。3と5は壺の口縁部。3は内外面、5は内面に赤彩している。4は甕の口縁。口唇外面に何かを横方向に押圧して描いた文様を擦り消した跡がある。8は壺の頸部、9は甕の胴部である。内外面ともに磨かれている。10は磨石(149.4g)。端部に使用跡がみられる。

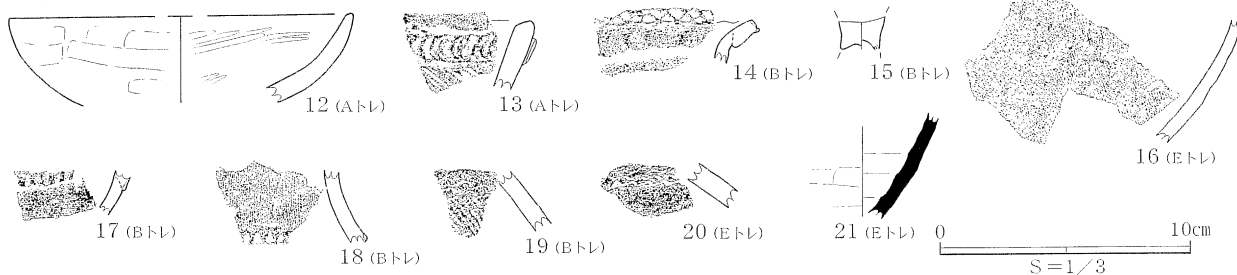


004 竪穴住居跡実測図・出土遺物



005 溝跡実測図・出土遺物

遺構外一括遺物



第13図 004 竪穴住居跡・005 溝跡実測図・出土遺物、遺構外一括遺物

004 竪穴住居跡(第13図、図版3・5)

遺存状況 トレンチャー3方向以上床面影響 規模 不明

壁高 20.7cm～25.3cm 主軸方向 N-23°～30°-W (推定)

周溝・炉 検出されず 柱穴・ピット 柱穴P1:深さ63.1cm、貯蔵穴P2:34.3cm

床面 全面的にかなり硬化している

所見 掘り込みが浅い上に、壁は壊されていないところが少ない状態であった。土層断面にかかったピットは、その位置からすると、貯蔵穴と考えられる。

遺物 第13図1～3は甕である。1の内外面は横方向の工具ナデが見られ、内面はその後ヘラミガキが施される。2の内面もきれいに磨かれる。胎土に海綿骨針が目立つ。4は鉢である。内面は横方向に、外面は横一縦に磨かれている。口唇にも縄目などは一切施されない。5は壺の口唇部。推定外径は約22cm。内面と外面折り返しの下部に赤彩がなされる。6は甕の胴部、7は壺の胴部である。縄文充填区画外に赤彩。8は高坏の脚部。古墳時代中期頃か。

005 溝跡(第13図、図版3・5)

Aトレンチ北側からCトレンチにかけてほぼ東西に通る溝である。規模は推定幅2m程であり、確認面からの深さは最大で46cmである。重機で表土を除去する際に発見できず、土層断面でプランを推定せざるをえない状況である。覆土に中世戦国期の陶器細片を含み、元豊通寶(篆書、北宋:初鑄1078年)とみられる銅銭(第13図9)も出土している。11は布目瓦である。覆土上層に部分的に硬化層がみられる場所があり、埋没後には道路としての使用も考えられる。能満城に関連するものであるかどうか、今回の調査では判断できない。

遺構外出土遺物(第13図・図版5)

第13図13は縄文後期後葉。連続爪形刺突の隆帯が巡る。14～20は弥生時代後期。15はミニチュアの脚部である。16はハケ目調の調整が施された甕。17は鉢。21は須恵器。瓶類の胴部破片である。

まとめ

従来、畑地の表面採集では、弥生時代および古墳時代の遺構が予想されていた。しかし、調査区的位置する小台地上の発掘調査例はなかった。面積は少なかったが、今回の調査によって、当該期の集落が展開していることが明確となった。混入した須恵器から、周囲に他時期の遺構の存在も予想される。

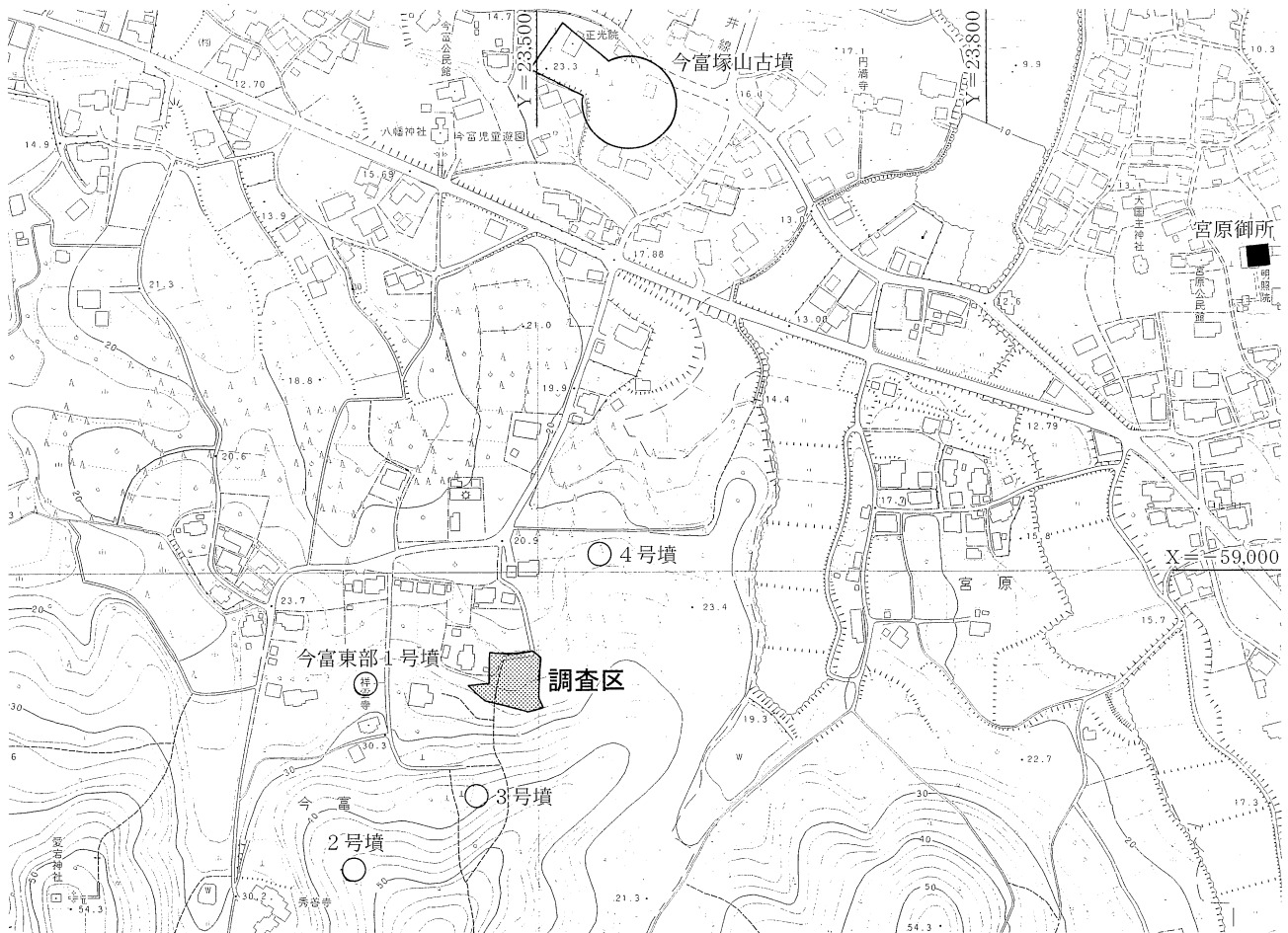
001 竪穴住居跡や002 B 竪穴住居跡のような掘り形は類例も多い。文献1によると、竪穴の四隅を主に深く掘り下げて、床面としてロームブロック以外に暗褐色土を充填する方法の機能として、雨水の排水処理や居住空間の保湿などの効果が考えられるという。ハードロームの吸水性の悪さに対処するための工夫であろう。掘り形の形態は、竪穴住居の建築という段階を考える上での重要な情報であるが、掘り形の実測図面まで掲載する報告書は意外に少ない。調査現場での意識が大切であり、今後の課題として留めたい。

また、調査区内には中世の所産と考えられる溝跡も通っているが、能満城跡と同時期の所産かどうか、詳細なデータは得られていない。今後、付近の調査では気をつけなければならないであろう。

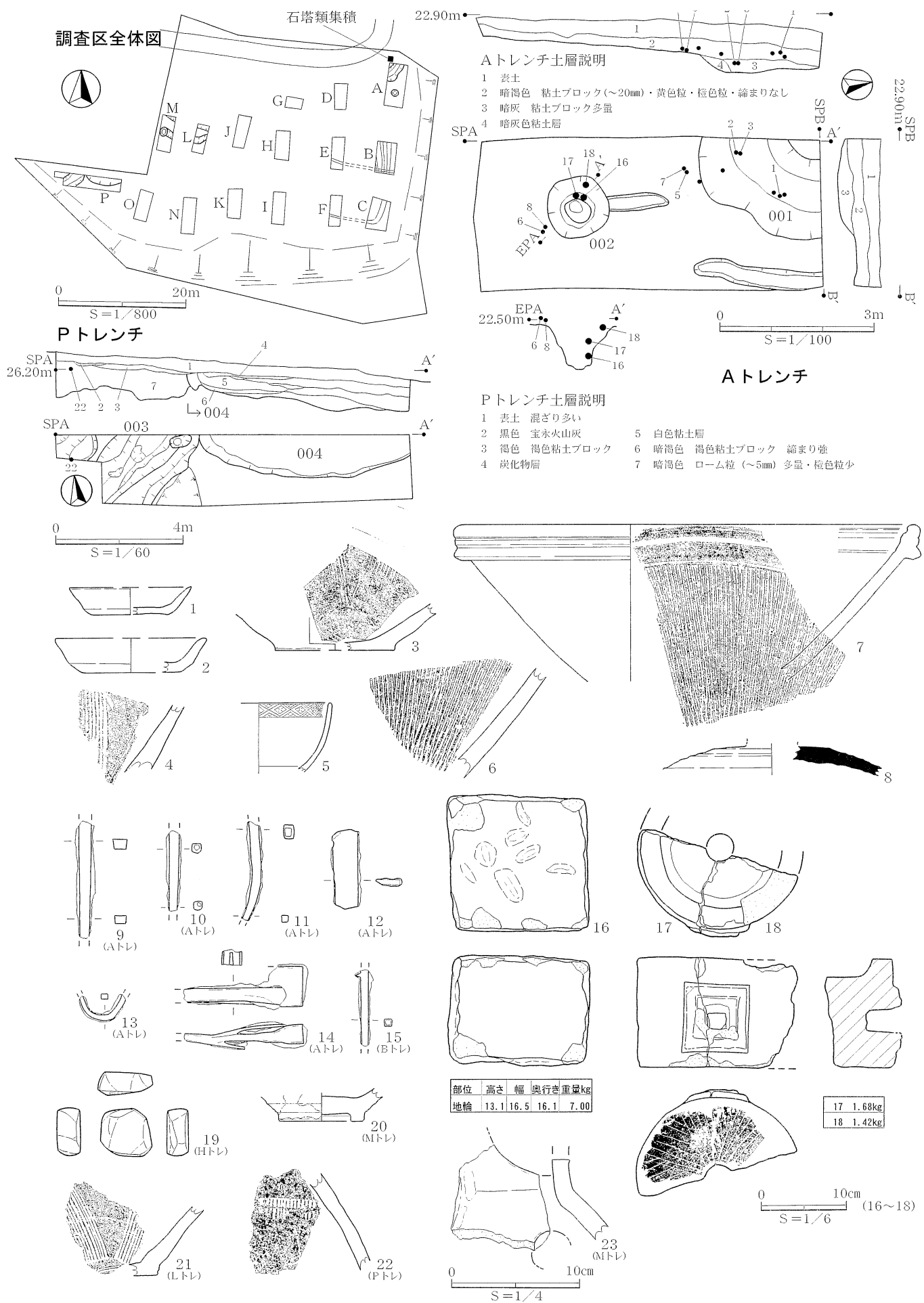
3. 今富遺跡群 立野前地点 (第14~16図、図版6・7)

調査概要 遺跡は養老川左岸の沖積平野が丘陵地となる境界付近に位置する。遺跡の周囲には複数の古墳が存在し、なかでも今富塚山古墳は、姉崎天神山古墳に次いで、市内で2番目の規模を誇る4世紀の前方後円墳である。調査区付近は「今富遺跡群」として、主に弥生時代から古墳時代にかけての、遺構密度の高い大規模な遺跡として調査例がある。今回の調査でもその時期の遺構が予想されたが、確認できなかった。調査区は標高22m~27mの斜面であるが、途中で大きく地形が変化している。斜面地形を水平にするための大きな削平があったことをうかがわせる状況であった。現表土の下に粘性土があり、地山は白色の粘土である。ハードロームは斜面の上方のみに見られた。宝永の火山灰(1707年降下)も同様であり、18世紀初頭以降に大きく地形が変わったものと考えられる。

この平場付近には、「葉蔵院」という寺があったと伝えられており、五輪塔などの石塔類が集めて置かれていた(図版6)。中世室町時代の所産とみられるものが多く(第16図)、寺の創建はその頃まで遡る可能性もある。調査ではその寺の基礎などの存在を考慮したが、結果的に明確なものはみつからなかった。遺物も中世のものは少なく、近世から近代にかけての磁器がほとんどであった。瀬戸(50点)や伊万里(20点)、信楽系(18点)のものが多く見られる。17世紀初頭から20世紀中頃までと時期に幅があるが、18世紀後半以降のものが大半を占める。地形を改変した行為が葉蔵院の建造であるとしたら、それは宝永の大噴火以降である可能性が高い。



第14図 今富遺跡群立野前地点周辺地形図 (S=1/5,000)



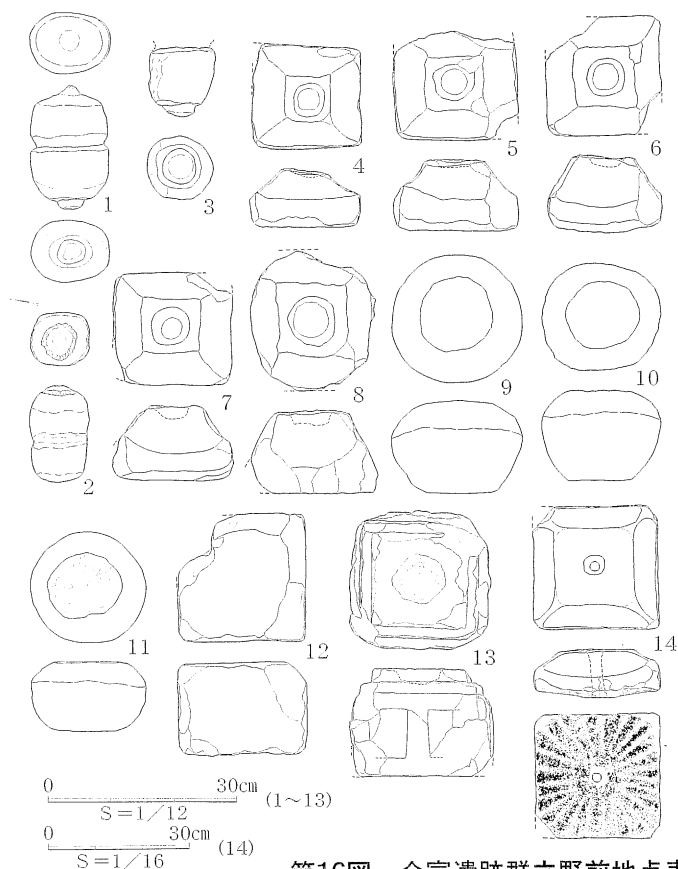
第15図 今富遺跡群立野前地点調査区全体図、A・Pトレンチ実測図・出土遺物

遺構と遺物 一番低い位置にあるAトレンチ(第15図)では、溝状遺構(001)と土坑(002)を検出した。土坑の覆土上層からは、石臼のほぼ半分が更に2つに割れた状態(第15図17・18)で出土した。石臼の割れ口には漆を塗った跡が残り、補修して使用していたらしい。擦り溝の目は8単位である。覆土下層からは、地輪の形状をした石(16)が見つかった。1と2はかわらけ。3と4は錆釉の瀬戸すり鉢。5は伊万里の碗で、19世紀初頭頃のものと思われる(図版7)。6と7は堺系のすり鉢である。すり目の単位は10本である。1～4は中世までさかのぼる可能性もある。9～14は不明金属製品。

他のトレンチでは、Mトレンチで時期不明の溝および井戸跡、Pトレンチで時期不明の溝状遺構(003)および土坑(004)が検出された。井戸跡は、1m程掘り下げたところで水が湧き、狭いトレンチ内でもあり、調査できなかった。近年、この辺りに数カ所の井戸があったという証言もある。

調査区内で最も斜面の上に位置するPトレンチの003溝状遺構は、斜面に直交する形で掘られている。覆土より中世鎌倉期の所産とみられる常滑甕(22)や山茶碗系こね鉢の破片が出土している。このトレンチでは、調査区内で唯一、上層の暗褐色土中に宝永の火山灰(2層)を検出している。004土坑は、その層の下位から掘り込まれているため、宝永の噴火以前の遺構である。他のトレンチではこの前後の暗褐色土層は残っておらず、斜面の削平によって失ったものと考えられる。

まとめ 現在、調査区南側の斜面上方台地上にある墓地には、中世の五輪塔や宝篋印塔が残り、据えられている。この辺りに、中世の墓域があったことは間違いなく、調査区の石塔類とも関連するものである。ただ、集積された石塔類と一緒に据えてあった墓石(全体図中■)には「宝暦二年」(1752)の銘が読みとれた。この年代あたりが、菓蔵院の建立年代として妥当な線であろうと考えられる。



第16図 今富遺跡群立野前地点表採石塔類実測図(付表)

今富遺跡群出土石塔類一覧表

番号	名称	部位	高さ	幅	奥行き	重量kg
1	五輪塔	空風輪	19.3	12.4	10.0	2.75
2	五輪塔	空風輪	15.3	9.4	8.4	1.53
3	五輪塔	空風輪	11.0	10.5	10.1	1.55
4	五輪塔	火輪	9.2	17.3	16.7	3.95
5	五輪塔	火輪	11.3	19.7	17.3	4.79
6	五輪塔	火輪	12.3	18.2	19.3	5.70
7	五輪塔	火輪	12.1	19.0	17.5	5.13
8	五輪塔	火輪	13.4	19.7	22.2	7.60
9	五輪塔	水輪	14.8	20.5	20.2	7.70
10	五輪塔	水輪	14.3	18.8	17.1	6.80
11	五輪塔	水輪	11.0	18.1	17.7	5.05
12	五輪塔	地輪	14.9	20.3	20.5	10.35
13	宝篋印塔	基礎	17.1	22.4	22.1	14.55
14	灯籠	笠	10.4	26.4	25.7	11.05

※ 3は空輪部分を欠失している

12は一部に面取りがあり、水輪未製品の可能性あり

14は石臼に転用されており下面に溝が刻まれている

報 告 書 抄 録

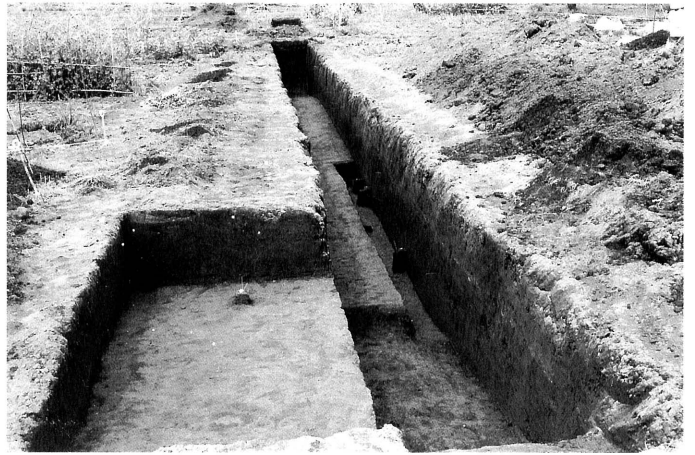
ふりがな	へいせいじゅうにねんどいちほらしなしいせきはくつちょうさほうこく
書名	平成12年度市原市内遺跡発掘調査報告
副書名	椎津正坊山城跡・能満遺跡群・今富遺跡群
巻次	
シリーズ名	市原市内遺跡発掘調査報告書
シリーズ番号	第14冊
編著者名	牧野 光隆
編集機関	財団法人 市原市文化財センター
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1,489番地 TEL0436-41-7300
発行年月日	2001年 月 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しいつしょうぼうやましろあと 椎津正坊山城跡	ちほけんいちほらし 千葉県市原市 しいつあきなべた 椎津字北辺田537-1	12219	セ320	35° 28' 04"	140° 02' 36"	20000418 ～ 0427	1,751.37㎡ のうちの 190㎡	集合住宅建設
のうまんいせきぐん 能満遺跡群 に二階台地点	ちほけんいちほらし 千葉県市原市 のうまんあきにかいだい 能満字二階台531	12219	セ323	35° 30' 42"	140° 08' 04"	20000508 ～ 0522	430㎡ のうちの 163㎡	個人住宅建設
いまとみいせきぐん 今富遺跡群 たてのまえてん 立野前地点	ちほけんいちほらし 千葉県市原市 いまとみあさたてのまえ 今富字立野前925-1、 925-2(一部)	12219	セ324	35° 28' 03"	140° 05' 31"	20000605 ～ 0616	1,788.53㎡ のうちの 179㎡	墓地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
椎津正坊山城跡	包蔵地	中世	土坑 1基 ピット 7基	陶磁器(中世・近世) 土師器(古墳時代後期) 埴輪・鉄製品	染付や青磁片が出土した。
能満遺跡群 二階台地点	集落	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居跡 3軒 竪穴住居跡 2軒 溝跡 1条	弥生土器 土師器・須恵器・紡錘車 陶磁器・銭	調査事例のなかった台地上において、弥生時代後期および古墳時代後期の集落跡を確認した。
今富遺跡群 立野前地点	包蔵地	中世 近世 近代	溝跡 7条 井戸跡 1基 土坑 2基	石塔類 陶磁器・土器	



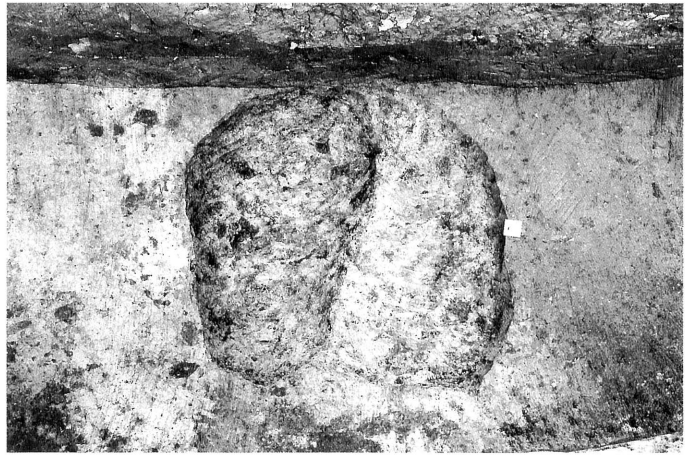
調査区近景 南東より 後方の森が正坊山城跡



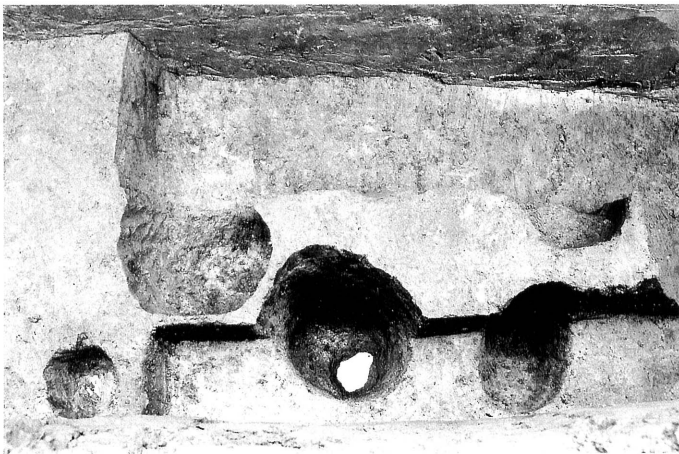
Fトレンチ 東より



Kトレンチ 拡張前 北より



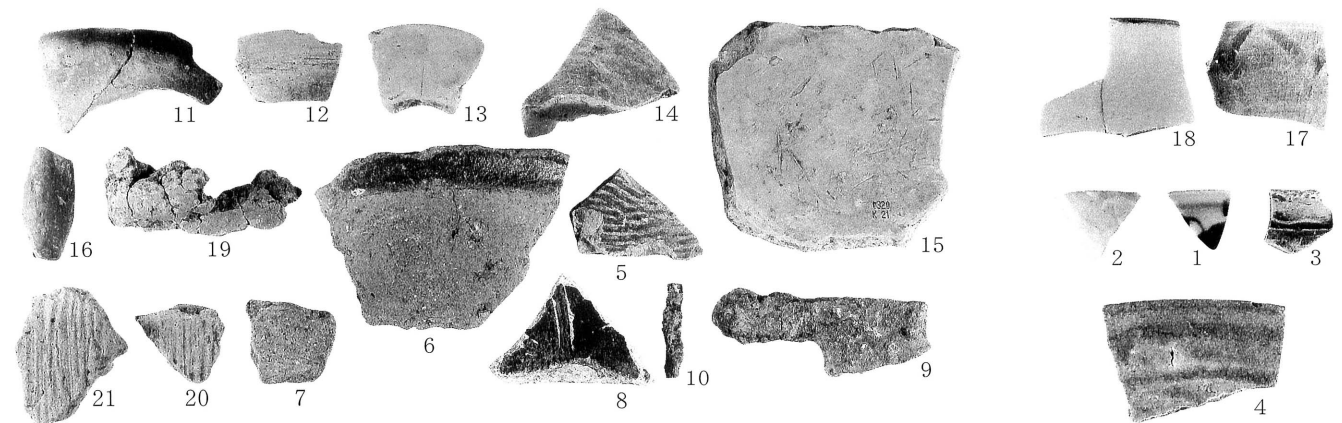
Kトレンチ 001土坑



Kトレンチ ピット群



下総層群姉崎層の露頭



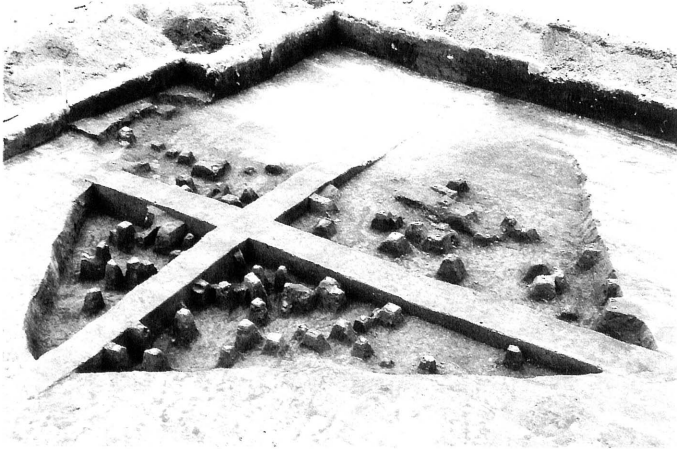
出土遺物



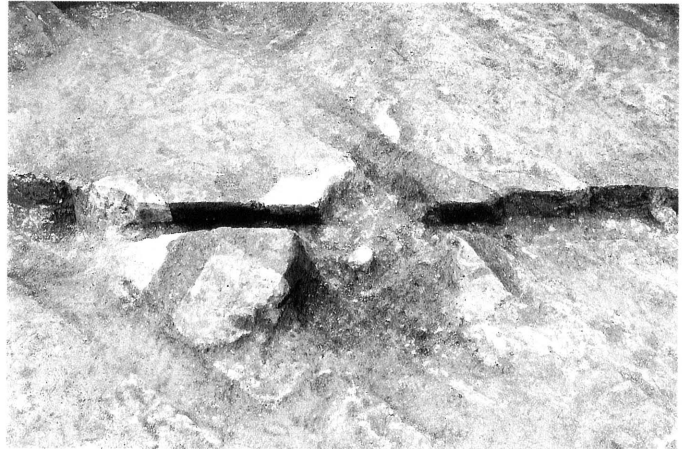
調査区近景 南東より 後方右手が能満城主郭跡



Aトレンチ 001竪穴住居跡確認



001竪穴住居跡 遺物出土状況



001竪穴住居跡 カマド



001竪穴住居跡 完掘



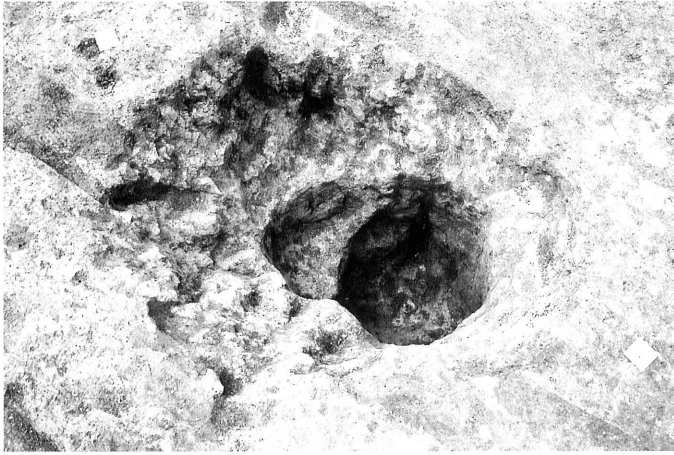
001竪穴住居跡 出入りロピットP 5



001竪穴住居跡 柱穴



001竪穴住居跡 掘り形



001 竪穴住居跡 柱穴 P 4



001 竪穴住居跡 掘り形東隅部分



002A・002B 竪穴住居跡 南より



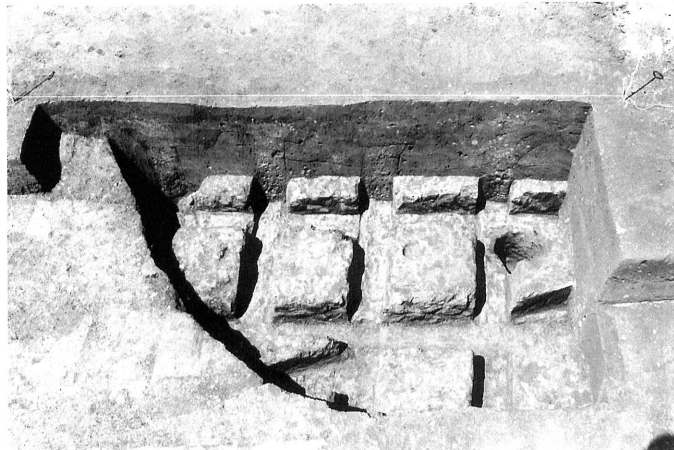
003 竪穴住居跡 西より



003 竪穴住居跡 炉跡



004 竪穴住居跡 遺物出土状況

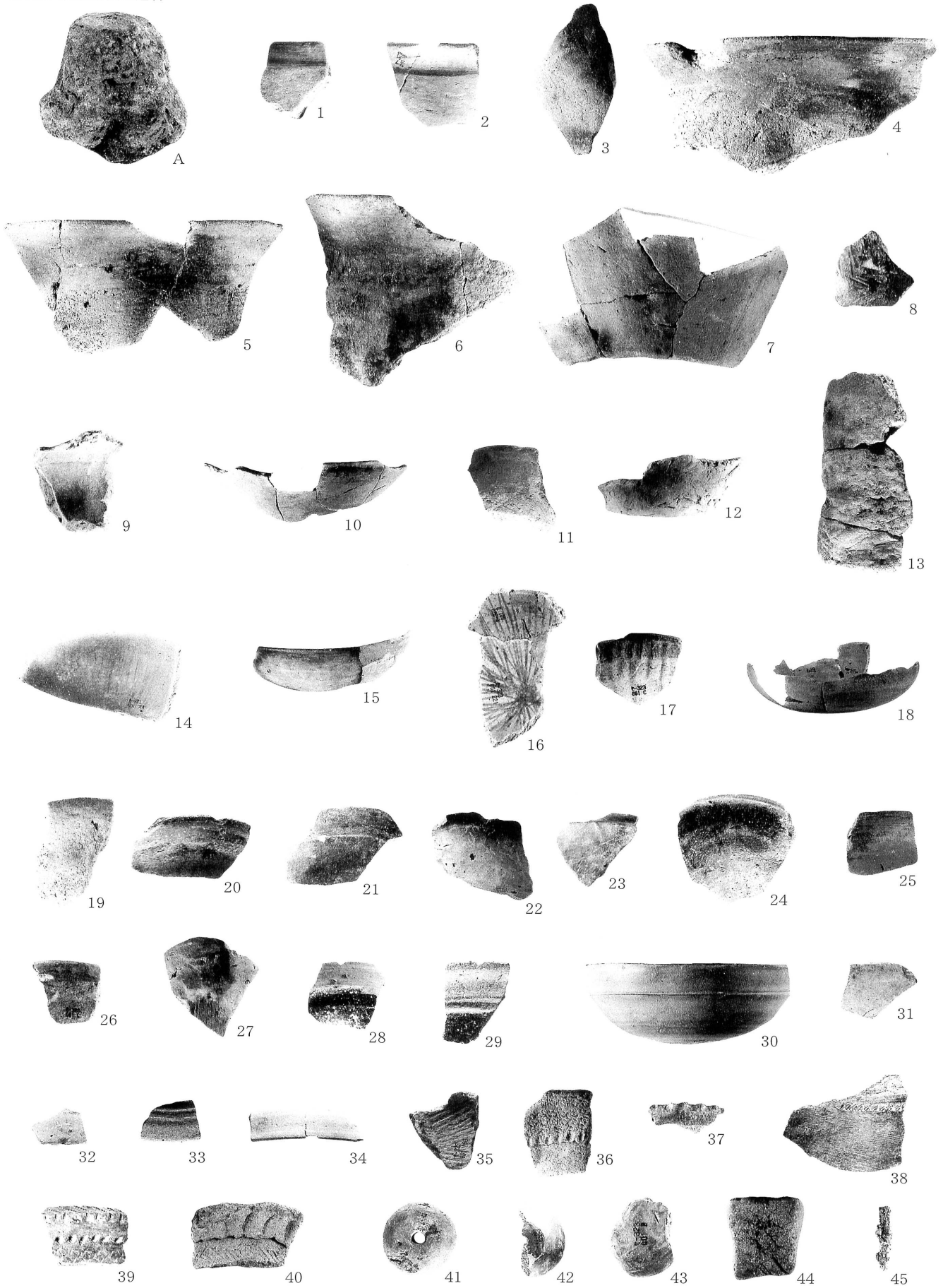


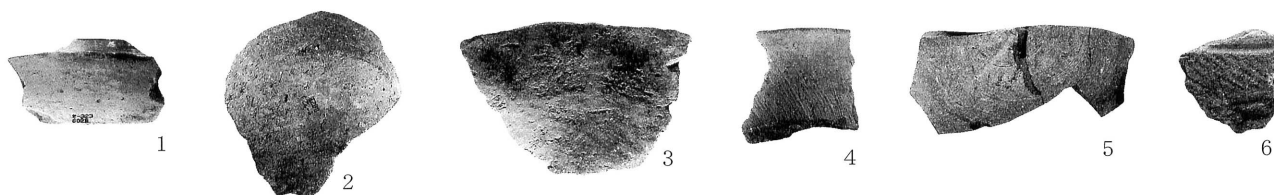
004 竪穴住居跡 東より



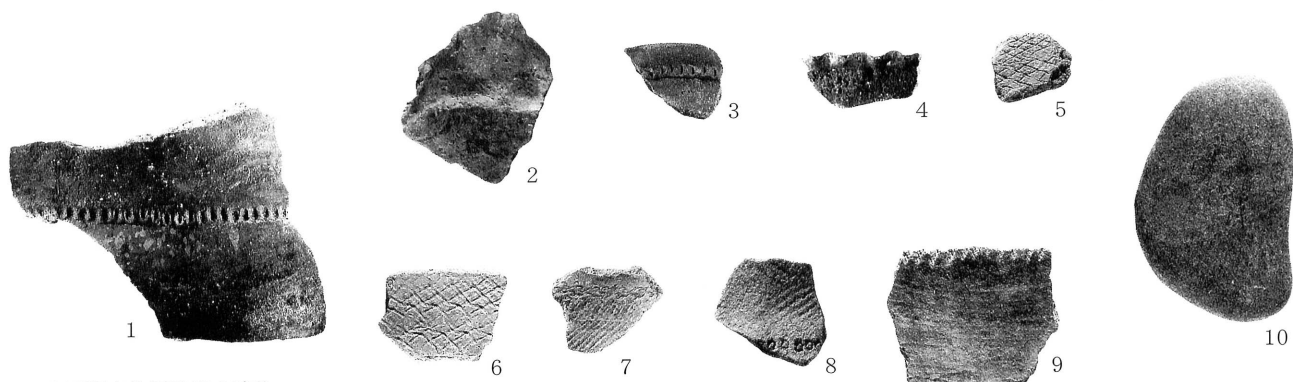
005 溝跡 東より

001竖穴住居跡出土遺物

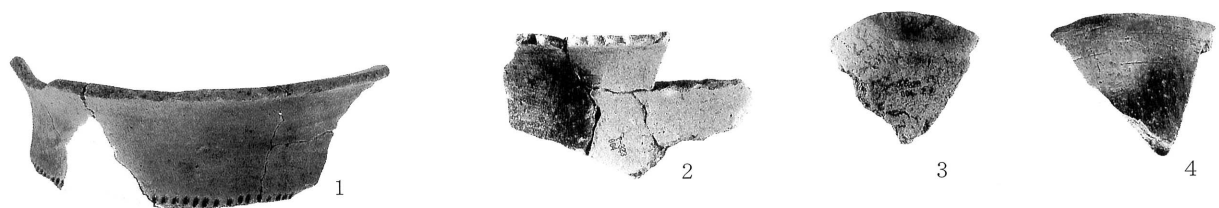




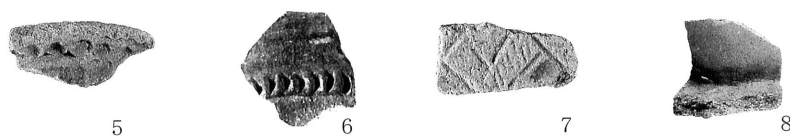
002A·B 竖穴住居跡出土遺物



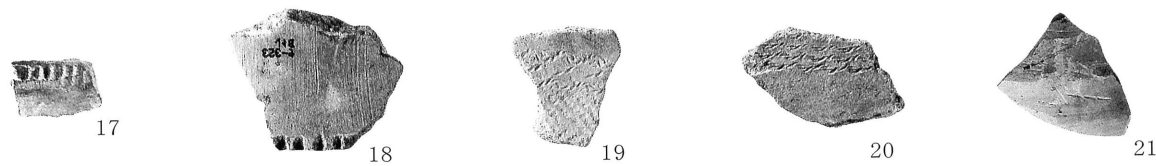
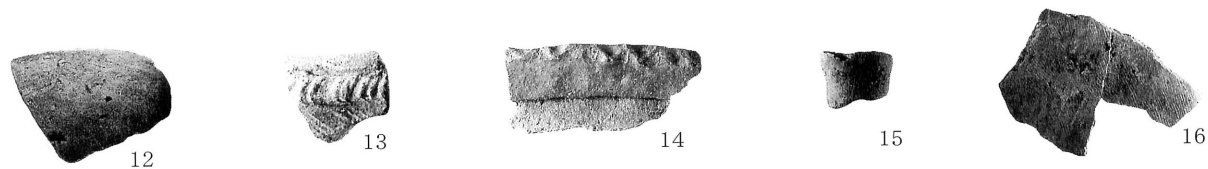
003 竖穴住居跡出土遺物



004 竖穴住居跡出土遺物



005 溝跡出土遺物



遺構外一括出土遺物



調査風景 西より



Aトレンチ付近石塔類



Aトレンチ



Aトレンチ 001



Aトレンチ 002土坑 遺物出土状況



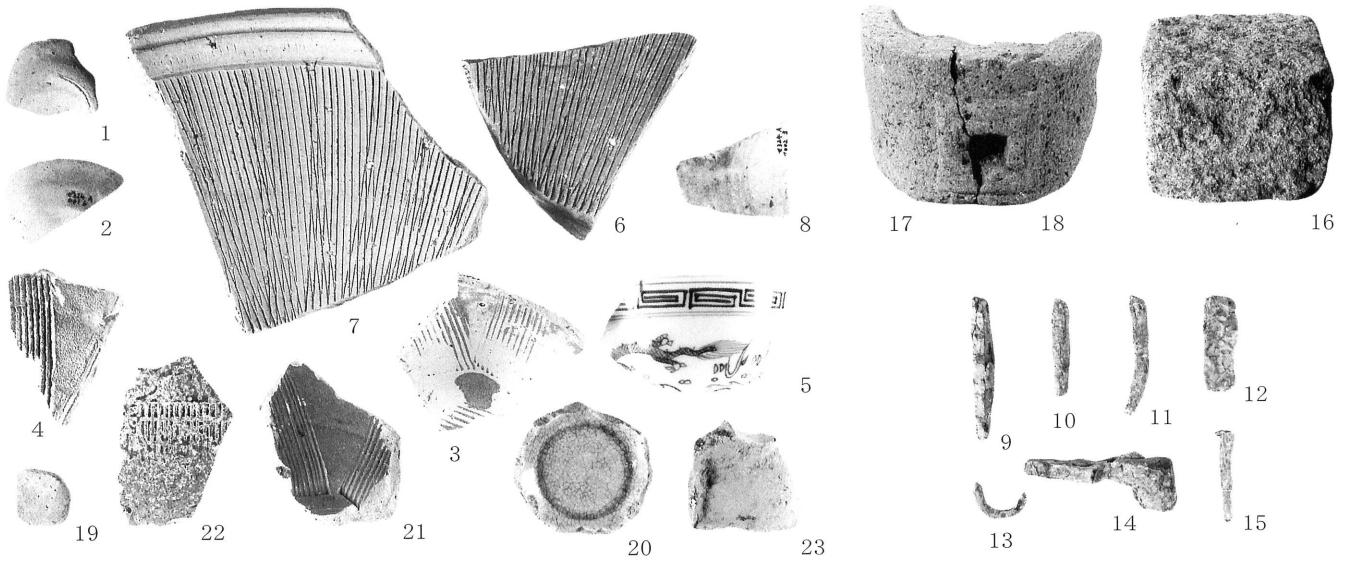
Aトレンチ 002



Pトレンチ 南東より



Pトレンチ 西より



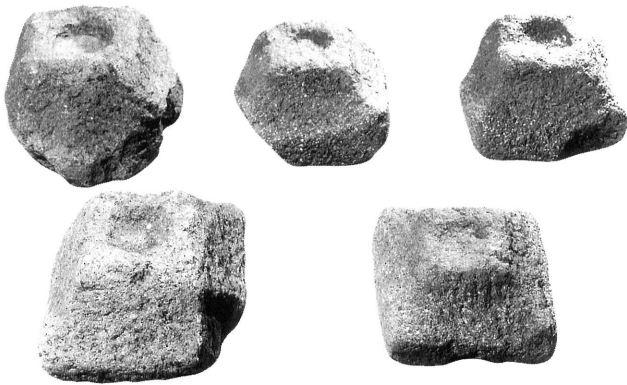
出土遺物



空風輪



近世～近代陶磁器類

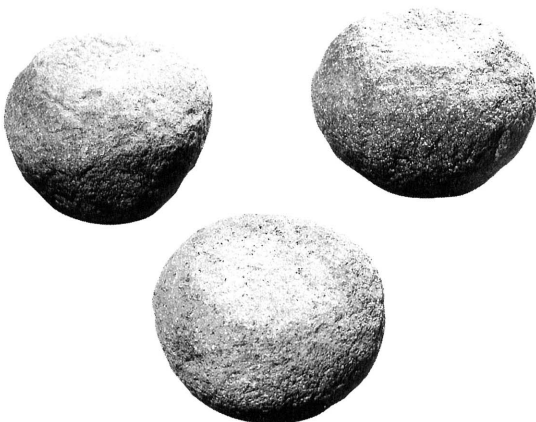


火輪



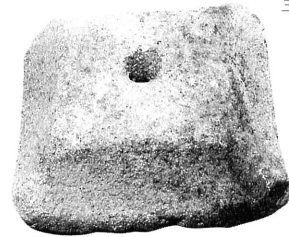
地輪

宝篋印塔基礎

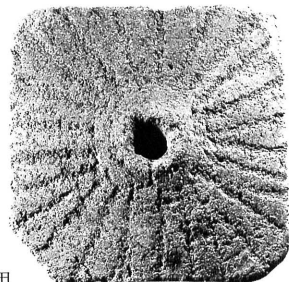


水輪

灯籠笠



裏面石臼転用



平成12年度 市原市内遺跡発掘調査報告

平成13年3月5日 印刷

平成13年3月15日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター
市原市能満1489

発 行 千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1-1-1

印 刷 三陽工業株式会社
市原市五井5510-1

